

41531

教科書文庫

4
810
41-1929
200030 1477

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

375.9
Sa19
資料室

訂新
新撰國語讀本
山丸春三
卷九



資料室

3757
2.19
1951

日二十二月一年四十大
濟定檢省部文
用科語國校學中

新新撰國語讀本

文學博士佐政編

大町芳衛
武島又次郎
杉敏介 補修

株式會社 明治書院



訂新撰國語讀本卷九目次

一 無上の大道	紀平正美	一
二 奈良の春	笹川臨風	二〇
三 湖青し(俳句)		二八
四 文學と人生	藤井健次郎	三〇
五 血塔	夏目漱石	三七
六 かなしき子(短歌)		三三
七 明治の文學		三五
八 三十年前	内田魯庵	四三
九 千里が竹(淨瑠璃)	近松門左衛門	五〇
一〇 過ぎて善きは親の意見悪しきは酒	井原西鶴	五九

一一 近世の文學……………三三

一、前期……………三三

二、後期……………三七

一二 紙鳶の奇計……………曲亭馬琴……………三七

一三 鴨子と鳧子……………式亭三馬……………三七

一四 玉かつま……………本居宣長……………三三

一、師をよく選ぶべきこと……………三三

二、教子にさとす……………三四

三、新しき説……………三四

一五 雨中石濱の庵にて……………加藤千蔭……………六六

一六 芳宜園大人の靈を祭る……………村田春海……………六八

一七 那須野(短歌)……………九三

一八 讀書の意義上……………阿部次郎……………九六

一九 讀書の意義下……………一〇六

二〇 狂文二篇……………一二三

一、鼠を責むる詞……………四方赤良……………一二三

二、鐘馗の贊……………宿屋飯盛……………一二三

二一 幻住庵の記……………松尾芭蕉……………二四

二二 筆のすさび……………吉田兼好……………二九

一、あだし野の露……………二九

二、しづかに思へば……………三〇

三、人のなきあと……………三〇

二三 末葉のやどり……………鴨長明……………三三

二四 鎌倉室町時代の文學……………藤岡東圃……………三六

二五 大原御幸……………(平家物語)…二五



新訂新撰國語讀本卷九

一 無上の大道

我等の身體も、我等の事業も、その他あらゆるもの、皆、宇宙無限の大組織體の一契機としてのみ其の價値を有する。我等が若し其の組織より離脱するならば、忽にして其の價値を失ふ。我等の知識の如きも、此の一大組織を完美ならしめるために意義あるものでなければ、即ち有限智となつて、寧ろその組織の妨をなし、延いては我等の理想を束縛し、却て自由向上の道を塞ぐに至るであらう。

理想は人としての光明である。理想なければ人としての價値を失ひ、墮落して賤劣に陥る。然らば理想とは何か。理想とは我等の生

活の組織統一體であつて、我等の諸慾求によつて組織せられたものに他ならぬ。我等が有する現實の慾求は、それ自ら形式的には既に組織せられたものであるが、更に一層その組織を完全ならしめようとする努力が即ち理想の働である。故に理想は形式としては既に存在する所の力であり、而して其の力の發露としては、絶えず或物を實現しようとする所の光明である。随つて又理想が現實を離れて了へば、それは空虚なる幻影に過ぎなくなる。故に理想が理想としての眞の働は、それが一步實現する、即ち諸慾求が一步組織せられるにつれて、愈進んで其の組織を完全ならしめようとする強き努力となつて現れる所のものでなくてはならぬ。

凡そ、事の何たるを問はず、自分がこれぞと思ふ所のものに對しては、精進努力を怠つてはならぬ。其處に事の成敗に關せず、常に一種の力の實現が感得し得られるであらう。即ち知識の上から言へ

ば、それだけ善の善たり惡の惡たる事を知るのであつて、自我の組織はそれだけ完成せられるのである。故に斯かる努力に於ては、現實と理想との對立は消えて、現實が即ち理想である。随つて現實は意義あるものとして、生生化化しつつあることを自知し自證することが出来るであらう。理想は斯くて空なる彼岸の幻影ではなく、此岸に於て我が當面を照す光明である。故に我等の理想は、全く努力によつて實現するものであつて、努力を外にしては、何等の光明も何等の威力も發揮せられないのである。勿論各自の適能性又は境遇上より、自ら或事に對して得手不得手は免れぬが、只その與へられたる所に進んで行けば、それが自己に適するか適せぬかも、亦自ら立證し得られるのが努力の意義である。斯くて努力は、絶えず一步一步に、何物かを確實に己が所有支配の下に來らしめる。此に於て一切の幸運は自己にのみ向ひ來るが如く思はれ、一切の境遇

自己の利益を
めざす
見よ
漂蕩の初めにけまう

は皆我がためのものであるかの如く感ぜられて、世界の萬有は悉く我が藥籠中のものとなるであらう。
然るに、若しその努力を寸時でも弛め、その間に有限知の條件的反省を許すならば、理想の現實性は之がために動搖を來し、各種の慾求は漂蕩奔逸して、皆雲煙の如く天空に向つて飛去るであらう。即ち今日爲さねばならぬ卑近の事も、馬鹿らしくして手が着かず、却て義務に輕重を生じ、利害は相對立して現れ、現實の世界が所謂苦悶の汚土、五濁惡世、末法澆季の世と化し去るであらう。若し斯かる間に彷徨し、執着してゐるならば、一旦自分に向ひかけた幸運も忽焉として消去り、百年勞苦して僅に得たる力も、亦無意義なものとなつて了ふであらう。されば徒に顧慮低迷する事を止めよ、價値なき杞憂をなす事を止めよ。我等は過去幾千百年の永き歴史を通じて護り來つた一切の經驗を要素として、只今茲に如實に「我」し

*支那唐代の高僧にして、雨に遇ふも濡れず、泥を履むも汚れずして、人皆之を神なりといへりと傳へらる。

て現存して居るのである。即ち慧照禪師の言の如くに、我等には六道の神光なほ存在し、無位の真人面前に出入して居るのである。されば我等の取るべき道は、唯己を信じ、その善しとして確信する所に猛進すべきである。我等は過去を脱して現在を得た。其の現在を捨つるにあらざれば、未來の新生命は得られぬ。
併しながら、茲に非常な覺悟を要する事のあることを看過してはならぬ。即ち過去、現在、未來は只單なる流ではなくして、組織ある理法の流であるが故に、我等は自己の爲した事より生ずる結果は、善かれ悪しかれ、すべてその責は自己が負はねばならぬことである。而して斯かる覺悟を以て努力する事は、やがて我等の人格をして不滅ならしむる所以である。昔の偉人といはれ、聖人といはれる人も、決して何等の錯誤も無かつたものはあるまい。只彼等に存する努力の力は、やがて一切の錯誤を理想化し得たのである。有限な

(20)

る我等の立脚地より言へば、我等各自は、無限の大組織内に於て、時間的にも空間的にも、前に承けて後に繼ぐべき一大任務を有つた一契機である。故に此の任務をさへ果せば、我等自らが其の儘で無限者・絶對者である。如何に義務を意識し、是非の判断を正しくすることも、未だ實行せず、随つて此の任務を果さざる間は、未だ眞に無限・絶對の域に入つたものとは言はれない。されば當然の歸結は、怠惰即ち悪なりと言ふ事である。徒に善惡是非曲直等の相對的概念に迷ふ勿れ。此等は有限智の葛藤のみ。努力・勉勵以外に、善の善なるものなしとは、我等の行爲に於ける信仰でなくてはならぬ。

畢竟何が善であるか、或は又何が悪であるかは、事物それ自らで定め得らるべきものではない。只絶對的に言はれ得る事は、善とは絶えず善を爲さむとする努力によつて繋がれて行くものであつて、若し此の努力を止めれば、善の力は無くなるといふ事である。

* Socrates,
(B.C.469—399)

希臘の哲學者

我等は満足せる豚たらむよりは、満足せざるソクラテースたらむ事を望むものである。これは我等の本性の光である。何となれば、斯かる心情の下にのみ更に向上・發展の餘地が存し、努力そのものにも幸福を感じ得るからである。

然るに、世には此の世を以て本來苦痛の谷なりとし、人生は寧ろ生存の價値なきものなりと見る厭世觀が随分古くからある。而してこの厭世觀は人間には餘程根本的のものらしく思はれる。文學上に顯れた所から見ても、悲劇的の作品の多くが成功して居るのでも明白である。けれども、厭世的の思想は、畢竟、無益にして而も不十分なる思考の所産である。諸事物が皆相聯關せるこの世界に於て、我のみ獨り我がまま勝手を振舞はうとするか、或は何事をもなさずして只徒に奔逸に任せた抽象の思考にのみ耽るからである。斯かる人の眼から見れば、如何にも此の世は常に末法澆季の世で、

生きるに價値なき世界であらう。併し自分は繰返して言ふ、畢竟これは無益にして而も不十分なる思考の所産である。」と。

勿論厭世觀の出づるも無根柢と言ふのではない、随つて無條件に否定するのでもない。けれども、我等は人生が苦ならば苦なりとするもよいが、苦なりとなすならば其の苦なる所以を思惟せよと言ふのである。思惟を深くすれば、それだけ組織は完成せられる。組織が完成せられるれば、それだけ苦も樂化せられるのである。人間の生命に於ては、生死は必然的の要件であるが、而も死は生の消極的條件であるが如くに、厭世觀も亦新しき力としての新世界を創造し出す消極的條件として必要なものと認め得るのである。此に於て、孔子が「未だ生を知らず、焉ぞ死を知らむや」といつた語にも、無限の意味を味ひ得るのである。登り坂も登り終れば降りとなる。されど中途に躊躇して、何處まで登らなければならぬかと考へるのは、

人間の消極的

徒に身心の萎靡、困憊を増すのみであらう。

思惟をして思惟する限り思惟せしめよ、肉體をして勞し得る限り勞せしめよ。而して靜にその成敗の跡を顧みよ。自ら會心の笑が其所に催されて來るであらう。孟子は「その心を盡すは其の性を知らるなり、其の性を知るは天を知るなり」と言つた。天を知るとは、即ち無上の大道、至善の世界を、我が上に實現する事に外ならぬ。斯くて一切の物は皆この人格活動の必然的要素となる。而して一切の要素の組織統一としての理想は、我が内に在つては我を動かす力であり、我が外に在つては我を案内する導者である。されば我等は確實に現實の大地に立脚して、而も永遠の理想を見詰めつつ進まねばならぬ。徒に理想にのみ醉はず、現實にのみ偏せず、天地自然が生化化する至道に乗入らねばならぬ。天地自然は絶對的に服従してのみ、又よく絶對的に征服し得る。故に斯かる至道に乗入つてこ

自然の性を盡すは其の性を知らるなり、其の性を知るは天を知るなり

伸張の行

石んもあふらふと、至極の子

そ、始めて眞の自由は得られるのである。(紀平正美の「人格の力に據る」)

二 奈良の春

四季の風景中、奈良が格段すぐれて居るのは春である。

奈良の旅籠屋、三輪の茶屋には東風が暖簾をそよそよと吹いて居る。河内の山山には霞が棚引いて、麥秀づること五六寸、菜の花は限なく金色の浪を打ち、その間を紫雲英の紅が交織に彩る。雲雀の聲は遠近に朗かに響き、はるかに軟傍耳無香具山が朧に見える。春の大和路はまことに長閑である。大宮人は春日野の飛火の野守に若菜の摘み頃を尋ねた。げに咲く花の匂ふが如く、と謳はれた奈良の都は、春日熙熙たる情景に溢れてゐたに相違ない。

猿澤の池水が温んで、衣掛柳の芽が青くふくらんだ頃に、奈良見物の旅人はぞろぞろと奈良驛で下りる。春日から大佛へかけて、土

春日野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてむ(古今集、詠人不知)
青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今さかりなり(萬葉集小野老)

東大寺に屬する一堂にして而も當山第一の最古の建物なり。
東大寺に屬する一堂、若草山麓の高處にあり、その舞臺に立てば、大和平野・生駒の峯峯一眸の中に收まる。



奈良人形

産物を賣る店店の呼聲にも自ら春風の情味がある。紅に青に金色に、美しく輝かしく彩られた奈良人形は、如何にも春にふさはしい。蕨餅・火打餅の皿の上にも、落花がひらひらと舞つて來る。實に奈良は春の世界だ。春日の巫女ハルノメは其の名を聞くだに春らしい情緒を唆るではないか。二月堂ニグハチドウといひ三月堂サンゲツドウといひ、春の名を既に負うてゐるではないか。若草山は春を象徴し、佐保山・佐保川は春の心を表現してゐる。同じく武藏野といふも、關東のそれは秋月を連想させるが、若草山の裾にある武藏野は若菜摘の情景を偲ばせる。二月堂の高欄に凭つて遙に故都を俯瞰する時、言葉以上に寧樂の春の晝は長閑で、大杉の

30
70

運慶と湛慶とを指す。東方の密迹金剛は運慶の作、西方の那羅延金剛は湛慶の作。



三月 堂

樹の間に咲亂れた花は風なきに散り、絲遊は
ちらちらと古き礎石の邊に立舞ふ。一つ二つ
衝きだす鐘の音は、大氣に溶入り、やがて消え
やらぬ餘韻を遠く雲間に漂はしめる。

春雨の絲よりも細く降りこぼれる日に、更

二月 堂

に故都を訪ねて見よ、薬師寺の古塔
は煙りて見えわかず、法隆寺は靄の
中に霞んで見えぬ。その古の繁華の
名残たる一木一石も悉く雨に濡れ
て、春愁の情は無言の裡に深い。大佛
殿は寂寞として、八角鑄透しの金銅
燈籠は物淋しく佇んでゐる。名工が
鍛へに鍛へた腕で彫刻した南大門

推古朝に鞍作鳥、百濟御太、稍後れて山口費大口、薬師徳保。
天平時代に國中連公磨、稽文會、稽主動、及び良辨、行基などの高僧。
平安朝に康尙、定朝、覺助。
鎌倉時代には康慶、運慶、快慶、湛慶、康辨、康勝、これ等の名匠が奈良に多くその遺作を留む。

の仁王像は、たとへ浮世に如何なる變亂があらうとも、一切人界を超越して、永劫に藝術の春を誇りげである。薄暗い殿堂の奥深く法の燈が微かに瞬いてゐるところに、崇高尊嚴な、慈悲圓滿な御佛を仰ぐ時、外には春雨が音もなくそそいで、四邊に森嚴の氣が漲る。眼が冴えて、微かな光が漸う明るくなり、我なく、執なく、現世を超越して、渾然として佛の懷に抱き入れられる心地がするであらう。その佛像は一千年の古、非凡な藝術家が信仰の強い燃ゆる力を注いで、打ちおろす鑿の痕ごとに自信の緊張を示した名作である。斯かる名作に對して見れば、藝術が既に信仰であり、鑑賞も亦信仰である。奈良の文化は春の文化であつた。奈良の古藝術も亦春の藝術であつた。さうして藝術の奈良は彫刻の奈良である。推古朝より鎌倉時代に至るまで、幾多の名人巨匠が心血を瀝いだ製作の幸に今日に傳はる物も多く、其等に依つて當代の文化を追想し得ることを

祝福せねばならぬ。其等の藝術品は單に我が邦だけに止まらず、實に世界的の藝術品である。

將來せられた唐代の文化が加はつて、七堂伽藍となり崇高なる



(寺大東)佛大の良奈

ないのは、當然ではあるが、又欣快の極みである。

流石に五丈三尺餘の大佛を建立する程あつて、奈良の藝術は極めて規模が大きかつた。一面に懺悔滅罪の清淨を現して高雅端嚴

佛像となつて、茲に日本文化の光は赫灼として輝いたのであつた。その影響の感化は固より唐代の文化に多謝すべきものがあるが、藝術の日本は、藝術の唐に對して更に遜る所の

であることも、他面には信仰敬虔の熱烈さを表して雄偉瑰麗なものであつた。一切五濁惡世の無量無數無邊の衆生をして、皆金色三十二相を得て、寶蓮華に坐し、無量の樂しみを享け、天の妙華を降らしめること



(寺華法)音觀面一十

は、其の當然の歸趣であつた。されば巨匠が洩えたる腕に打下す鑿の一

刻一刻には、溢るる力あり、燒くが如き熱あり、心血俱に瀝下して、藝術の香は續紛として高かつたのである。名利を忘れ、我慾を離れ、ひたすらに其の藝術に打瀝がれた名匠の魂は、その作品の裡に磅礴して、燦爛として輝いてゐる。

天平時代に於ける奈良は佛地であり、淨土であり、極樂世界であつた。併し遷都のことも行春の名残をこごめて、盡きやらぬ春愁は到る處に遺つてゐる。ただ藝術の春のみは久遠不滅の壽を保つて、世界的古文化の香は高い。

白法隱没して鬪諍修羅の世が多いのに、その間にありて、この世からなる極樂淨土を現じ、懺悔滅罪して平和の春を出現させようとなされた聖德太子聖武天皇の御理想は高遠で、その御徳は洪大無量である。人類の理想はそこにある。その理想を現實化して、平和の世界、理想の天地を目前に現したのが天平時代であつた。併しながら人間から罪障を永久に脱離するは容易ではない。既に天平の世でさへ玄昉の我執、廣嗣の我執があつて、いがみあつてゐたではないか。平和の中心で、理想の權化で、信仰の對象であつた盧舍那佛の巨像でさへ、度度の劫火に焼かれたではないか。梵唄鐘聲に全都

玄昉は興福寺の僧廣嗣は藤原宇合の子。廣嗣は玄昉及び吉備眞備を除かむとして上表せしも願みられず、兵を擧げて叛し、却て誅せらる。

東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・藥師寺・西大寺・法隆寺。

を揺がした七大寺の大伽藍も多く荒廢したではないか。藝術の春を誇る諸佛の靈像さへも蜘蛛の網に閉され、或は手足離散の憂目に逢はれたではないか。平和の春は久しくなかつた。人界に描き出された極樂淨土は遂に永遠のものではなかつた。

けれども、よしその理想の實現は刹那の壯觀であつたとは言へ、人間歸趨の目的點はここに在る。世界を擧げて齊しく平和の春を樂しむべき時が到來せねばならぬ。人類は我執の偏見に囚はれる現状から更に進み出でねばならぬ。奈良に遊んで、天平時代の平和を回顧する時、旺然として理想の現實化を思はざるを得ない。

斯く考へ到ると、古美術の都奈良は決して過去の遺物でない。徒に古文化の奈良を讚歎するだけでは物足らぬ。古名匠の腕の沓えを歎美するだけでは能事と謂はれぬ。奈良に於ける理想の現實化を、廣く、深く、強く、永遠に復活させねばならぬ。過去の華やかさにの

み憧憬するの愚を已めよ。過去とともに、我等の眼前には現在があり、未來が横たはる。我等が古文化の跡を尋ね、古藝術の香に酔はうとするのは、玩物喪志の爲でないのは無論である。

悠久なる平和の春よ、早く人間界に歸り來れ。古美術の都奈良の春は、我等に斯くあれかしと教へてゐるではないか。

(惟川臨風の「自然と文化との諧調」に據る)

三 湖青し

湖青し雪の山山鳥かへる

子規

涼しさや机上の白紙飛びつくす

紅葉

山裾を牛の行く見ゆ蕎麥の花

竹冷

秋の川眞白き石を拾ひけり

漱石

元日や一系の天子富士の山

鳴雪

雨戸たて遠くなりたる蛙かな

虚子

石垣に鴨ふきよする嵐かな

碧梧桐

大雪の海に消えこむ静けさよ

小波

燕や三十三間堂の雨

酒竹

西瓜太郎躍り出でよと割つてけり

瓊音

そよぎかはして若葉が喜べる程の風

井泉水

四 文學と人生

諸君、文學は何であるか。文學は人生の縮圖である。海のやうに廣い人生の中に現れたる百般の姿相を、盪の中の如き狭い表面の上へ宛らに描寫したのが文學である。

さらば人生とは何であるか。よく世間では、吉凶禍福は糾へる繩の如し。と言ふが、人生の運命は啻に糾へる繩の如きのみではない。彼の大空に横たはれる雲の如く、在るかと思へば消え、消えたかと思へば湧き、峯かと思へば巒、龍かと思へば虎、乍にして淡く、乍にして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるものである。只此の一片の雲でさへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾動搖が、どうして吾等の感興を惹起さずに止まらう。變幻出沒極まりないのが人生の姿相である。これが人生であるかと思へば忽ち其の姿をかへ、それが眞相かと思へば又忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易に之を捉へる事が出來ず、凡眼はなかなか其の眞相を認める事が出來ない。しかも捉へる事がむづかしければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、之を捉へたい、認めたいと思ふは、誰しもの人情である。然るに詩人は、その靈妙な腕と其の鋭敏な眼とを以て人生の眞相を捉へて來て、それを世人の前に示すのである。これが文學である。そこで世人は自分の熱望の目的物が眼前に現れるから堪らない。人の視線は之に吸ひつけられ、觀ても觀飽く事を知らないのである。

橋本氏、明治時
代に於ける日本
畫の泰斗

私は文學は人生の縮圖であると言ふ。その大體の意味は前に言つた通りであるが、猶、爰に一つの疑が残つて居る。それは外でもない。その縮圖とはどういふ意味かと云ふことである。雅邦の描いた瀟湘の八景は、かの揚子江邊の大觀の縮圖である。また、その邊で賣つて居る寫眞も、やはり同じ大觀の縮圖である。寧ろ寫眞の方は實際の通り、一木一石少しも實際のものゝ違はず寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうではない。精密に見れば、實際には生えて居ない樹木が生えて居たり、實際にはある巖が省かれて居たりするであらう。併しながら、兩者共にかの壯美なる大觀の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると言ふ。縮圖はかの雅邦的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か。之が残つて居る所の問題である。此の問題は一刀兩斷に答へることが出来る。凡そ文學とあらう程のものは、必ず雅邦的の縮圖であり、又さうあるべきである。なる

程、只縮圖といふ點より見れば、寫眞の方が遙に精巧な縮圖であらう。併し今少しく他の點から考へて見れば、さうではない事がわかる。凡そ物には要と云ふべき點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之を擧ぐる必要もなく、否、寧ろ擧げない方がよい場合がある。實際の物には穢い處もあり、醜い處もあり、又不完全な處もある。必要の點以上に此等をも残らず擧げる時には、却て吾等の感興を害ひ、吾等の想像を破つて、彼の江邊の美を發揮しようとした折角の努力も失敗に了るのである。されば、ただ江邊の美觀の肝要な點を極めて鮮明に描いて、其の他は總て觀者の想像に任せる方が、その美觀を眞に發揮する所以である。故に美を發揮する力からいへば、雅邦的縮圖こそ眞正の縮圖である。そこで此の人生百般の姿相を捉へて、吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を満足せしめようといふ文學は、必ず雅邦的縮圖であり、又さうあるべき事は、殆ど

架説するの必要もないと信ずる。

諸君、文學は何であるか。文學は人生の救である。凡そ吾等に苦惱のあるのは「我」がある故である。「我」あるが故に空しき望を起し、限なき慾を逞しうしようとする。「我」あるが故に限なき名聞の奴となり、限なき黄金の僕となるのである。「我」あればこそ憎悪もあり、怨恨もあるのである。この意味に於て、此の人の世はげに火宅である。されば、菩提樹下に大悟徹底せられた聖者も、「我」を以て一切苦の根本となされた。若し吾等にして此の我執を離れ、妄見を脱するを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。而して、吾等をして此の我執を離れ、妄見を脱せしむる所の易行道は何であるか。それは文學に外ならぬ。吾等が麗しい詩や歌を吟詠し、戯曲・小説を玩味する時には、全く身を一種の別天地に移して、一切の我執、妄見は茲に全く消滅し、讀みゆく己、讀まれる文學、一つに

直観的
直接の外見
経験スル下

融けて差別もなくなり、唯唯、量り知られぬ歡喜の境にあるが如き思に浸るのである。而もこれは當に一時の救のみでなく、永く吾等の生涯に影響を及ぼすものである。固より獨り文學と謂はず、其の他の藝術も、皆吾等を靈化する力を持つて居るには相違ない。併しながら音楽なり、繪畫なりは、比較的専門的技術的要素が多く、何人でも其の力に随つて救済を得るといふわけにはゆかない。然るに文學には比較的、その要素が少い。其の文字と文章とを解し得る人ならば、誰でも其の救済の力に預ることが出来る。これ、私が文學は解脱の易行道であるといふ所以である。

抑、吾等人間を救済するものが三つある。第一は只今述べた文學の力、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直観的に救済の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救済しようとし、宗教は其の中間に立つて、一面は情により、他面は

(一) Hellas.

希臘。

意志によつて救濟しようとするものである。此の三者は、此の如く分け登る麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高峯の月を見ようとするものである。斯様に考へれば、その何れの道によつて救濟を求むるも、其の人人の自由であつて、必ずしも己に同じき者に黨して異なる者を伐つ必要のないことは明白である。然るに此の事を忘れて、所謂文藝派の人人と所謂道學派の人人と往往にして相闘ぐが如きは、實に愚な話である。

併し斯く言へば、或は、唯、文學のみにより、若しくは道德のみによりて、果して全き人格の救濟が得られようか。と問ふ者があるであらう。私は必ず之が可能であると信ずる。眞に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず美を含んで居るのである。善を兼ねざる美はなく、美を含まざる善はない。之は必ずしもヘラス民族の經驗ばかりではない、又吾等の親しく經驗するところである。

倫敦塔の一部

(三) Wars of Roses.
英國の York 家と Lancaster 家との王位争奪の戦。(1455-1485)

(四) Arch.
弓形門



されば、眞に美なる文學によつて救濟せられる者は、人格全體の救濟であり、眞に善なる法則又は眞に正しき法則によつて救濟せられる者も亦、人格全體の救濟である。と信ずる。(藤井健次郎「時代思潮」)

五 血塔

左へ折れて血塔の門を入る。

今は昔、薔薇の亂に、目に餘る多くの人を幽閉したのはこの塔である。草の如く人を薙ぎ、雞の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのはこの塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番のやうな箱があつて、その傍に冑形の帽子を冠つた兵士が銃を突いて立つて、頗る眞面目な顔をしてゐる。

塔の壁は不規則な石を疊み上げて厚く造つてあるから、表面は決して滑かではない。處處に蔦がからんで居る。高い處に窓が見え

(一) Tapestry.
掛毛氈

ヨーク家のエド
ワード四世の子
兄はエドワード
五世といひしが、
叔父リチャード
三世の爲に位を
奪はれ此の塔内
に幽閉され、間
もなく弟とも
に刺さる。

る。建物の大きいせむか、下から見ると甚だ小さい。鐵の格子がはま
つて居るやうだ。番兵が石像の如く突立つて居る傍に、余は眉を攢
め、手を翳して、この高窓を見上げて佇む。格子を洩れて古代の色硝
子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて烟の
如き幕が開いて、空想の舞臺がありありと見える。
窓の内側は厚き帳が垂れて、晝もほの暗い。窓に對する壁は漆喰
も塗らぬ丸裸の石で、隣の室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ
仕切が設けられて居る。只その真中の六疊許の場處は、^二沓えぬ色の
タペストリで蔽はれて居る。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸體の女
神の像の周圍に一面に染抜いた唐草である。石壁の横には大きな
寢臺が横たはる。厚樫の心も徹れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄
の蔓と葡萄の葉とが、手足の觸るる場處だけ光を射返す。この寢臺
の端に^三二人の少年が見えて來た。一人は十三四、今一人は十歳位と

思はれる。幼き方は床に腰をかけて、寢臺の柱に半ば身を倚せ、力な
き兩足をぶらりと下げて居る。右の肱を傾けたる顔ととも前に
伸ばして、年上なる人の肩に懸ける。年上なるは幼き人の膝の上に
金にて飾れる大きな書物を開いて、そのあけてある頁の上に右の
手を置く。象牙を揉んで柔かにしたやうな美しい手である。二人と
も鳥の翼を欺くほどの黒き上衣を着て居るが、皮膚の色が極めて
白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、さては眉毛、鼻付から、衣裝の
末に至るまで、兩人とも殆ど同じやうに見えるのは兄弟だからで
あらう。

兄が優しく清らかな聲で膝の上なる書物を讀む。

わが眼の前にわが死ぬべき折の様を想ひ見る人こそ幸な
れ。日毎夜毎に死なむと願へ。やがて神の前に行くなる吾の
何を恐るる。

* Amen.
の終に唱ふま

弟は世に憐なる聲にて「アーメン」と言ふ。折から遠くより吹く木枯が
が、高き塔を撼かして、一度は壁も落つるばかりに、ごうご鳴る。弟は
ひたと身を寄せて、兄の肩に首をすりつける。雪の如く白い蒲團の
一部がほかに膨れる。兄は更に讀み續ける。

朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば明日ありと頼むな。

覺悟をこそ尊べ。見苦しき死にざまこそ恥の極みなれ。

弟はまた「アーメン」と言ふ。その聲は顫へて居る。兄は靜に書を伏せ
て、かの小さき窓の方へ歩み寄りて、外の面を見ようとする。窓が高
くて背が足りぬ。床几を持つて來て、その上に爪立つ。百里を包む黒
き霧の奥に、ぼんやりと冬の日が寫る。屠れる犬の生血にて染抜い
たやうである。兄は「今日もかうして暮れるのか。」と弟を顧みる。弟は
只「寒い。」と答へる。命さへ助けて下さるなら、伯父様に王の位を進ぜ
るものを。」と兄が獨言のやうにつぶやく。弟は「母様に逢ひたい。」との

み言ふ。この時、向うに掛つてゐるタペストリに織出してある女神
の裸體像が、風もないのにふわりふわりと動く。

忽然、舞臺が廻る。見ると塔門の前に、一人の女が黒い喪服を着て
悄然として立つて居る。面影は青白く窶れては居るが、どここなく
品格のよい、氣高い婦人である。やがて錠の軋る音がして、ぎいと扉
が開くと、内から一人の男が出て來て、恭しく婦人の前に禮をする。

「逢ふ事を許されてか。」と女が問ふ。

「否。」と氣の毒さうに男が答へる。「逢はせまつらむとは思へど、公の
徒なれば是非なしと諦め給へ。」と口を緘みてあたりを見廻す。壕の
中では「かいつぶり」がひよいと浮上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に與へ、「ただ束の間をかい
ま見むとの願なり。わが頼、引受けぬ君はつれなし。」と言ふ。

男は鎖を指の先に巻きつけて思案の體である。「かいつぶり」はふ

いと沈む。ややありていふ「牢守は牢の掟を破り難し。御子様は變る事なく、すこやかに月日を過させ給ふ。心安く思して歸り給へ。」と金の鎖を押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏗然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや。」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど。」牢守が言放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人。」と言ひながら、女はさめざめと泣く。

舞臺が再び變る。

脊の高い黒装束の影が一つ、中庭の隅にあらはれる。苔寒き石壁の中からすうとぬけ出たやうに思はれた。夜と霧との境に立つて、朦朧と四邊を見廻す。暫くすると、同じ黒装束の影が又一つ、陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで、「日は暮れた。」と

脊の高いのが言ふ。晝の世界に顔は出せぬ。と他の一人が答へる。「人殺しも多くしたが、今日ほど寢覺の悪い事はまたとあるまい。」と高い影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話を立聞きした時は、いつそのこと止めて歸らうかと思つた。」と低いのが正直に言ふ。「絞める時、花のやうな唇がぴりぴりと顫うた。」と透きとほる様な額に紫色の筋が出た。「あの唸つた聲がまだ耳について居る。黒い二つの影が再び黒い夜の中に吸込まれる時、時計が櫓の上でがあと鳴る。空想は時計の音とともに破れる。石像の如く立つて居た番兵は、銃を肩にして、ことりことりと敷石の上を歩いて居る。」

(夏目漱石の「倫敦塔」に據る)

六 かなしき子

高崎 正風

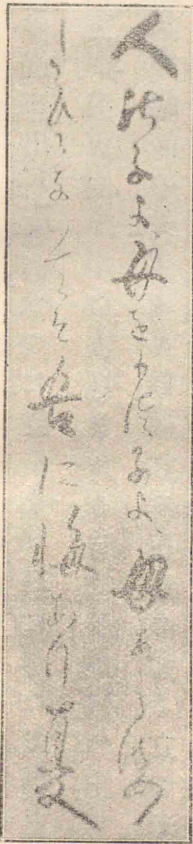
うちゑみて膝にはひ寄るかなしさはわが子ひとの子
かはらざりけり

○

落合 直文

父ぎみよ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば
死なれざりけり

人の子よ母を
もつ子よ母あ
らはたひにな
いでそ吾に悔
あり 直文



落合直文筆蹟

○

正岡 子規

たまみづのしづく絶えたる檐の端に星かがやきて長
雨はれぬ

○

井上 通泰

杉垣のしたをくぐりてやり水のうき世にいづるこゑ

きこゆなり

○

佐佐木 信綱

大

瀧をおほふ瑞枝木だちをもるる日にぬれ羽ひかりて

鶴鶴ごぶも

○

上 柴舟

小さき火も投ぐる光ははるかなりやぶらであらむわ
が歌の反古

○

與謝野 寛

鷗なすかづく御船は沈むとも造るすべありあたらま
すらを(潜航艇の沈没を悼みて)

七 明治の文學

維新の偉業正に成りて、開國の國は一度定まるや、世間は西洋の

物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術技藝を顧みるに遑あらざりき。況や美術文藝のこの如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無數の古典は廢紙となりぬ。この間にあつて、纔に文學の微光を存せしものは獨り新聞紙なりき。

新聞紙の刊行はこれ亦西洋に學びしものにして、當初は専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國內に普及して、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるるに共に、新聞紙の經營者も亦これ等の讀者に對して、その娛樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて幕末以降久しく失意の地にありし戯作者が、所謂「續き物」と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ、めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。

從來筆を政治論にのみ執りたりし人人も、この種の文藝の人心

柴東海著
末廣鐵腸著
矢野龍谿著

に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に架空の脚色を立てて、自家の主張を具體的に説明せむことを企てたり。佳人之奇遇、雪中梅、經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調、時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ、明治は既に十七八年を経たり、西洋の學術も技藝も稍咀嚼せられたり。世の先覺者は、かの徒に物質の皮相にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝美術の評價も日に漸く高からむとせり。この勢に乗じて、坪内逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戯作者系の人人もこれに呼應して起てり。ここに所謂才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て、直に人生を描破せむとするものは、將に踵を接して出

でむこせるなり。

思ふに、新文藝の勃興は半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し、維新以來日に隆なりし西洋文明の謳歌は、ここにその極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せられ、國語教育の奨励、古文學の研究が隆昌を極めしは恰もこの頃なりき。されば新文藝の先達は、嘗に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、或は元祿文學に摹倣するあり。輕妙なる才筆を以て一時に鳴れる饗庭篁村は八文字屋に學びたるものにして、又我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。

紅葉が艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は

巧に男兒の意氣を描きぬ。されどその題材は稍單調なりき。良久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小説、或は神怪不可思議なる妖怪談、或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷しつつ、その取材は日に日に人生の暗黒面に向つて進み去らむとせり。その間、或は光明小説といひ、家庭小説と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求を滿し、人生に理想を與ふるものに非ざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清日露の大役を経て、俄然一等國の伴に伍せり。戦勝に酔ひし豪奢の餘弊と、避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。顧みれば、嘗ては文藝の形式をのみ評論したりし批評家は、漸く人生

の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神説となり、或は自然主義といひ、無理想、無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ説く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は、多岐に惑ひて空しく煩悶するのみ。而して所謂自然派の作家は、益々人生の暗黒面を誇張して、好みてかの悶悶として焦燥し、狂奔し、疲憊困頓、踰踰踉踉たる敗殘の青年を描きつつ、以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が暫くここに同情の慰安を得たる如く感ぜしは、蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く渾沌たる思想界を出でて、更に高く更に深き人生の眞意義を捉へむとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に秩序ある討究を重ねむとせり。思ふに、我が小説界が崇高偉大なる理想に逢着して向上の一路を發見すべきは、甚だ久しからざらむとするなり。

上來、主として小説の變遷を敘したり。最近の文壇に於て最も注

香川景樹の流派。
天保時代の所謂
月並調の名人。

目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來常に流行し來りし抒情敘景の小詩形も、亦甚だ衰へたるには非ず。

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼刺梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌俳句といへば、専ら活社會と交渉なき閑人、隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。但し所謂幕末の志士及び國學者の和歌には、露骨なるほど當時の社會の現況に接觸したる者少からず。雖も、その詩的價値に至りては疑なき能はず。後年、かの國粹保存論、國文學研究等の盛なりし時にいたりては、落合直文等こそその門下生等この手によりて、歌道はまづ青年の間に入り來りぬ。かくて、偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はむとする傾向を生ぜり。また俳道には正岡子規出づるあり、天保の俗調を排して、清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡淡たる寫實の妙趣を鼓吹し、ただ俳句のみならず、

和歌にも亦一新生面を開拓して一派をなし、且つ寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この派より出でて、筆を小説に揮ひたるものに夏目漱石等あり。

この他、明治の新文藝としては、別に新體詩あり。當初は外山、山等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻のやや乾燥なるに慊焉たる者は、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へむとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らむとするあり。中頃、島崎藤村の溫雅優美の調、土井晚翠が縱横跌宕の風、最も青年の間に喜ばれたり。今や新詩の格調日に新なりと雖も、或は險怪、或は蕪雜、未だ雄渾偉大にして眞に國民の詩歌と稱すべきもの頗る稀なるに似たり。

更に純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池、福地櫻癡、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては三宅雪嶺、徳富蘇峯、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月等あり。その文各、特色あり、長短ありと雖も、皆縱横自在にして、言はむとする所盡さざるはなし。現代の所謂普通文は、純文藝の著作よりも、寧ろ此等の人人の筆に負ふ所多きに似たり。

八 三十年前

三十年前

鐵道馬車が新橋と上野、淺草との間を疾驅して、到る處で脱線するものが東京の誇となつてゐた頃、霞ヶ關附近へ行くと、瀟洒な洋装をした貴婦人の二人や三人に、必ず邂逅したものだ。右も左も、洋風の家屋や庭園の連続したこの界限の、一種特異な貴族的の空氣に浸りながら、霞ヶ關を下りると、その頃はまだ練兵場であつた日比谷の原を隔てて、壯麗な鹿鳴館の白聖が、エキゾチックの波動を周

(二) この文は大正四年の作なれば、その頃より起算せるなり。
(三) 麴町區。外務省の所在地。
(四) Exotic. 異國情調。公園。現今は

邊に漂はして、行人に文明の微醺を與へた。

その頃、鹿鳴館の名はエキゾチックの響を傳へて、直に舞蹈會を聯想させた。今では舞蹈會は天長節の夜會の儀式となつて、小數外交團に専有されてゐるが、その頃は殆ど連夜の催であつて、遠くからでも鹿鳴館の白聖を見ると、オーケストラの美しい旋律が耳を掠めるやうな心地がした。

侯井上の薨去が端なくも憶ひ出させたのは、此の鹿鳴館の舞蹈會であつた。就中、大官將星が役者のやうに白粉を塗り、鬘を着けて踊るといふ前代未聞の假裝會には、滿都驚異の眼を睜つた。轢轆として送り込まれた當夜の伊井公侯は、俊輔、聞多の昔に若返つて、まづ異様な扮裝に雲集せる賓客をどつこ笑はせれば、さしにも謹嚴、方直、容易に笑顔を見せたことのない含雪將軍までが、緋威の鎧に長柄の槍を横たへて、天晴な武者振を示し、重厚沈毅な大山將軍さ

(一)Orchestra.

樂隊。

井上馨。

伊藤博文。

山縣有朋。

大山巖。

へも、丁髷の鬘に袴を着けて踊り出したのであるから、ましてその他の卿相摺紳貴婦人、令嬢等が、如何に思ひ思ひの異裝に趣向を凝して、開闢以來の有頂天を極めたことか。

當時、伊井公侯の内閣を輔佐して、革命的に日本の文明を改造しようとしたのは、時の内閣の智囊といはれた文相森有禮であつた。森は早くから外國に生活し、長州の青木周藏と列んで、渾身に外國文化の浸潤した明治の初期の二大ハイカラであつた。且つ青木よりも一層徹底して剛健敢爲の氣象に富んでゐたから、身、文教の首班に座するや、先づ根本的に之が改造を企てた。而も最も力を注いだのは女子教育であつた。

優美よりは快活、柔順よりは才發、家事よりは社交、手藝よりは學藝といふのが女に對する彼の注文であつて、因循不活發な女を改造するために、女子教育の程度を高くし、外國語を重要課目として、

嘗て外務大臣たりし人。

(-) It is a dog.
National Reader
の最初の言葉。

傍ら洋樂及び舞蹈を教授し、直轄女學校の學生には洋裝をなさしめ、高等女學校には歐風の寄宿舎を設け、英國婦人の下に歐風生活を營ましめ、日本の女をして全く西洋の女たらしむべく教育した。突飛なここには、婦人乗馬講習所まで出來て、若い女の入門者がかなりに輻湊した。瀟洒なる洋裝で、肥馬に横乗するものを此處彼處で見かけた。若い女が流行に浮かされるのは當然としても、六十の婆さんまでが牛に牽かれて善光寺まゐりで、娘と一緒に舞蹈の稽古に出掛け、おさんごん迄が夜業の雜巾刺を止めにして、お嬢さんを先生に「イット イズ エ ドッグ」を始めた。

が、かういふ猿芝居的歐化熱がいつまで續かう。初は催眠されて一緒に踊り狂うた民衆も、漸く眠が覺めると、苦苦しくもなつたし、馬鹿馬鹿しくもなつた。且つこれが條約改正のためで、一朝事を誤れば將來の國運にも影響するといふので、忽ち猛烈なる保守的の

三
勝安房

動が起つた。維新以來二十一年間沈黙した海舟伯を始として、意見書や建白書が提出され、國論は鼎の湧くが如く沸騰して、日本の危機を絶叫した。舞蹈會の才子佳人は、恰も阪東武者に襲はれた平家の公達上臈のやうに、影を潜めて屏息した。

井侯は遂に歐化政策の張本人として挂冠したが、潮の如くに押寄せる民論は、益、政府に肉迫し、易水劍を按ずる壯士は、慷慨激越、あはや帝都は今にも動亂の巷となりうとした。

機一發、伊公の著名なる保安條令は青天霹靂の如く發布され、迅雷疾風の間に危険なる志士論客數十名を羅して、三日の間に帝都を去るべく嚴命した。時の警視總監三島通庸は遺憾なく鐵腕を發揮して、蟻の這ふ隙間もないまでに帝都を嚴戒し、物情恟恟、人心動搖して、維新の騷亂を再び見る心地あらしめた。

併し、當時の歐化熱は條約改正の必要上、外國人の同情を買ふた

めの手段であつたから、丁度、木下藤吉郎が三日間に清洲の城を築き上げたと同様に、一足飛びに歐米の文明を移さうとしたので、外貌だけは如何にも燦爛としてゐたが、その内容は極めて空虚であつた。假裝會は獨り鹿鳴館一夕の饗宴たるに止まらずして、この内閣の歐化政策を通じて徹頭徹尾が假裝會であつた。随つて失態百出よりは、寧ろ滑稽百出の喜劇に終つたが、縱令一時にしろ、一度汎濫した洪水は必ず若干の泥沙を殘留するもので、この文明の大洪水も、亦他日の新しい文化を萌芽するの養分を殘した。少くとも、今日の文藝の勃興は歐洲文化を尊重したこの時代に發達したのである。

井侯の歐化政策は最早夢物語となつた。當時の記念としては鹿鳴館が華族會館となつて殘つてゐるだけである。井侯の遺事が追懷されるに方つて、その歐化政策は皆滑稽の語草となつてゐるが、

此の如く舊物を破壊して、根柢から新日本を創造しようとした井侯の政策の小氣味よさは、眞に推讃に値する。且つこの歐化政策は、譬へば先祖から持傳へた山林を捨てて新しい果樹に植換へようとしたやうなもので、その策や必ずしも愚ならず、唯一時に逸つて、摩空の老幹を多く伐採したために、不測の洪水の汎濫する失敗を招いたが、その間に多少の美果を齎したことは争はれない。少くとも、今日の新しい文藝、美術の勃興は、間接に當時の歐化熱に負ふ所があつた。

井侯以後、所謂羹に懲りて膾を吹くが如く、種種の國粹主義は代る代る鼓吹されたが、大勢は遂に如何ともすることが出來ぬ。如何に防波隄を高くしても、外國思想は波浪の如くに押寄せて、只の一日も休なく、改造の進歩を切實に知らせて居る。

三十年前の歐化熱は馬車馬的の盲動であつたが、進歩に驀進す

る潑刺たる生氣に充ちてゐた。それに比べると、今日は何たる平凡無色であらう。眼前咫尺の苟安を貪つて、徒に外來思想を恐るるが如きは、何たる怯懦、何たる退嬰であらう。伊井公侯の歐化政策は文
 明の皮殻の摹倣であつたが、猶且つ人心を新にして元氣を横溢せしめた。余の空想は再び壯齡の伊井公侯を九泉に起して、木乃伊の如き社會に活氣を與ふるの歐化熱を鼓舞せむことを希望する。お
 さんごんまでが「イット イズ エ ドッグ」を學ぶの元氣あつてこそ、始めて日本の文化を大飛躍せしむることが出来る。井侯の歐化政策は滑稽に終つたが、しかもその滑稽は極めて尊い滑稽であつた。

(内田魯庵一きのふけふ)

九 千里が竹

別れゆく船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あこに擁

(一) 支那明朝の遺臣
 鄭芝龍とその子
 鄭成功

(二) 明朝の將軍。後、
 韃靼に内應して
 明帝を弑す。
 (三) 明朝の忠臣。司
 馬大將軍。

(四) 明の熹宗の年號。
 (三二五)
 (五) 錦祥女。

(六) 明の將軍。韃靼
 に降りしが、幾
 干ならずして鄭
 芝龍に應ぜり。

護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にぞ着きにける。

鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦裝束ひきかへ妻子に向ひ、「我が本國こいひながら、時遷り代變り、天下悉く李踏天が引入れにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰を尋ねむやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城に立籠るべき處もなし。然るに、某去んぬる天啓五年、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を乳母が袖に捨置きしが、其の子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して、今吳將軍甘輝こいふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便りに聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて、娘さへ承引せば、聾の甘輝も易易と頼まる

支那江西省九江府
支那湖北省武昌府嘉魚縣
支那宋代の詩人蘇軾

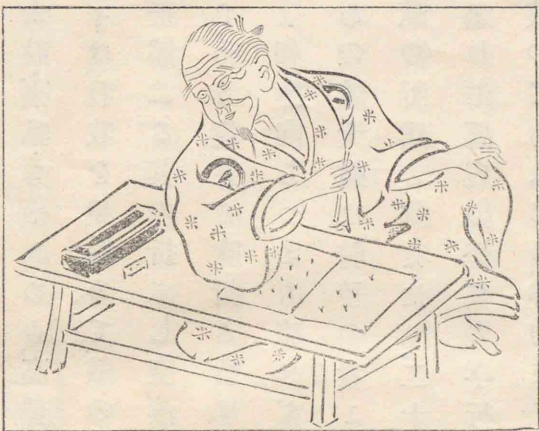
べし。これより道の程百八十里、打連れては人も怪しまむ。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ追着くべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹こて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば、潯陽の江、これ猩猩の栖む處、風景聳えし高山は、赤壁こて、昔、東坡が配處ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を牒し合すべし。方角こても白雲の、日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ和藤内、人家を求め忍ばむと、かひがひしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、飛越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣廣たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、なう母ぢや人。此の脛骨に覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行くほど藪の中むう、合點せり。方角も知らぬ日本人、唐の狐がなぶる

よな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴、根笹大竹押分け踏分け、なほ奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲、攻鼓攻太鼓喇叭ちやるめら、高音をそらし、ひやうひやうここを聞えけれ。すは、我我を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。茫然たる其の折ふし、空淒しく風起り、砂を穿ち、どうどうどう、竹葉さつと卷立て、吹折る竹は、劔の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、讀めたり。さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子の者。ここは聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳に因つて、自然と逃れし悪虎の難。其の孝行には劣ることも、忠義に勇むわが勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力ますます日本力、刃で向ふは大人氣なし。虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も畏れつべうぞ見えてける。

虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬。
淮南子
晋の人。十四歳の少年の時、赤手虎を搏して父の厄を救ふ。

案に違はず、吹く風と共に荒れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけいがみ懸るを事



ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、振つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいえい、虎の怒り毛、近松、門左、怒り聲、山も崩るる如くなり、和藤内も、門衛、大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息つかれ、石上に突立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたる其の響、響響、吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、やあやあ、和藤内、神國に生れて、神より受けし身體、髮膚、畜類に出合ひ、力立てして怪我するな、日本の地は離る

るども、神はわが身にいすず川、大神宮の御祓、納受などか無からむや、と肌の護符を渡さるれば、げに尤も、と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神祕の其の不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じりりじりりと四足を締め、恐れわななき岩洞に匿れ入る、尾筒を攫んで跳返し、打伏せ打伏せ、ひるむところを乗つかかり、足下にしつかとふまへしは、天の斑駒、素盞鳴尊の神力、天照す神の威徳ぞ有り難き。

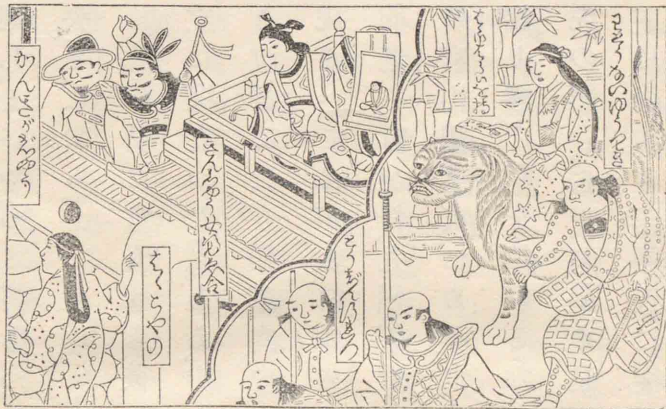
かかる所に勢子の者羣り来る、其の中に、大將と覺しき者大音擧げ、やあやあ、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる、其の虎は忝くも、主君右軍將李踏天より、韃韃王へ獻上のため狩出したる虎なるぞ、早早渡せ、異議に及ばば打殺さむ、しやぐわん、しやぐわん、とわめきけり、李踏天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、やあ、餓鬼も人数、しをらしい事ほざいたり、身が生國は大日本、風來とは舌長し、さ

ほど欲しがらる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、心太とやら、ここへ突きだし詫言させいぢきに逢うて用もある。さもない内はいかなことならぬならぬ。とねめつくる。やあ、物な言はせそ。討取れ。と一度に劔をはらりと抜く。心得たり。と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず、お心安し。と太刀差翳し、羣る中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、おのれ考耄餘さじ。と一文字に切りかかる。猶も神明擁護の験、神力虎に加はつて、むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴らし、猛り唸りて飛懸る。こは叶はじ。と安大人、勢子の者が差いたる劔、かり鉾數槍、手に當るを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霰氷を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内、ごつこ

い遣らぬ。と顯れ出で、安大人が素首を擱んで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

此の勢に官人ばら、後へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突立つたり。ああ、申し、御堪忍、御免、御免。と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫で、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手竝を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍、老一官が倅、九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜむため、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否、こいへば虎の餌食、否か、應か。と詰めかくる。なう、何の否で御座りましよ、韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。と、地に鼻つけて畏る。



國性爺合戰正本挿圖

何兵衛・太郎次郎十郎まで、面面が國所頭字に名乗り、二行に立つて

「おお、出かした、出かした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はむ。」と、指添の小刀はづさせ、これも當座の早剃刀、母も手手に受取つて、竝ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、絲鬢厚鬢、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭ひやつく風引いて、噓噓、村雨村雨。」と、涙を流すぞ道理なる。親子ごつと打笑ひ、揃ひも揃うた伴廻り、名も日本に改めて、何左衛門

ぼつたてろ。「承り候。」と、お先手の手振の衆、ちやぐちやう左衛門・東蒲塞右衛門・呂宋兵衛・東京兵衛・暹羅太郎・白城次郎ちやるなん四郎はるなん五郎うんすん六郎すん吉九郎もうる左衛門・じやが太郎兵衛さんごめ八郎英吉利兵衛、今參のお伴先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る、譽は異國本朝に踏跨げたる鞍鏡、虎の背中に打乗つて、威勢を千里に顯せり。

(近松門左衛門「國性爺合戰」)

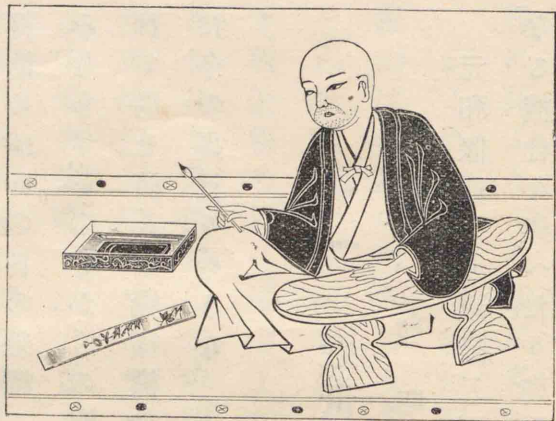
一〇 過ぎて善きは親の意見悪しきは酒

新春の御慶、何方も御同然の中、今年の正月が仕納めの親爺にも、「若うならしやりました。」と、定まつた口上を互に言葉棄てて通る。方方の御杯飲まぬ様なれど、目出度申し納むる所で押へられ、重ね重ね祝はれ、「日頃解飲は。」といふさへ、はやわけも聞えず。肩衣が臂に懸る

やら、袴の腰が曲むやら、扇はごこで落したか、雪踏をはきかへ、溝に踏被り、禮に行かいても苦しからぬ所へ行きて、二三年以前の御力落しを弔ひ、善からぬ事のみ盡して、今朝の七つに出で、夕の黄昏まで辿り行き、跣足なる方に草履はきて、鼻紙まで失ひ、逆鬢になり、勝負事に打毫けたる體して、よろりと歸り、正月早早から酔覺の機嫌悪しく、冷水四五杯息急しく飲むと、あたりあひの枕引寄せ、大駢して、一日の酔狂夢にや見るらむ。

然るにこの親爺なる人は格別の思ひ入れ、常常子供に言含めらるるは、「われ無常時到りて、臨終の時節急なる時には言ふ事も難からむ、別の仔細無し、唯、酒をやめて、月忌命日の齋、非時にも固く酒鹽の入りたる料理する事なく、家の内には壺、平皿の蓋も杯に似たる物を置かず、門に禁酒の札を石に彫りて建つべし。この言ひおきより外なし。昨日も日暮小太夫で説經を聞けば、あれほど力も強く利

發なる小栗殿も、横山に盛殺され給ふ。何を見ても聞いても、己のい



井原西鶴

ふ事に違ふ事はあるまじ。されども兼好とやらいふ者が、若き者の諺に「下戸ならぬこそ」と、異なことを書いて言ひならはせぬ。まだ生きて居らば、公事をしてなりとも、只是置かじと思へど、今は亡き後の記念の草子、聞くさへ疏まし。この頃、近所に酒盛があるやら、頭痛がして、こゝ顰めらるる顔色、もう合點がいたかと思ふ。尻眼づかひ、身の毛よだちて、嫌ながら聴きたるが、今金言となりて、よく聞入れたるしに、二番目に生れながら、確なる親の跡をふまへ、俵の數、藏に積み、金袋を擔げさせ、言ふ事に槌のきくも、炮烙頭巾を被りて意見たら

たら言はれし親爺の御蔭過分至極なり。
 兄に生れたる者は、世間からも親の眼鏡に外れし者ご、心ある人
 には鼻であしらはれ、交り疏くなりゆけば、類を以て集まる男酒一
 杯飲めば、その日の榮耀これに過ぎずと、面面の務むべき事解るの
 みならず、その心からの慰み事、一つも良からぬたくみ、手を懐に入
 れて世を渡る才覺、様様恐しき事ども、現世後生ともに取失ひ、たつ
 た今の事、見るやうな。(井原西鶴—俗徒然)

一一 近世の文學

一、前期(元和元年—享保二十年)

元和偃武より以降二百五十年の昌平は、我が文學の發達に十分
 なる機會を與へたり。加ふるに、徳川家康は兵馬倥偬の間にあつて
 文教樹立の志を懷き、關ヶ原の戦役以前、既に藤原惺窩、林羅山等を

(三三九—三三九)

(三三九—三三九)

(三三九—三三九)
又、道春といふ。
(三三九—三三七)

取
 經
 傳

二程子、朱子。

(三三六—三三六)

(三三九—三三五)

(三三七—三三四)
又、垂加と號す。

(三三七—三三五)

(三三六—三三六)

(三三六—三三六)

引見すること屢なりき。されば江戸時代の文藝の發達は、家康が施
 設に負ふところ甚だ多しとなす。

かくて幕府の創制に關して、先づ江戸に召されしは羅山なりき。
 羅山は惺窩の門人にして、夙に宋の程朱の學を修め、子孫代代家學
 を以て幕府に仕へしかば、漢學の最も榮えしものは程朱の學なり
 き。程朱學の外に、羅山より稍後れて、近江の中江藤樹と備前侯に用
 ひられし熊澤蕃山との陽明學を、會津侯に用ひられし山崎闇齋の
 垂加神道を唱ふるあり。その説く所、林家の説に等しからずと雖も、
 亦宋學の範疇を出でざりしに、元祿の頃、伊藤仁齋出づるに至りて、
 始めて宋儒の注脚を排して、直に經傳の本文に就て研究せむ事を
 主張せり。これを古學といふ。仁齋の子東涯も、父の説を奉じて、博覽
 宏識を以て聞ゆ。折しも五代將軍綱吉、好學の名あり。諸侯も競うて
 儒者を聘せしかば、元祿の頃に當つて、學者東西に輩出せり。中にも

(一) 物茂郷 (二) 三七八

江戸に出でし荻生徂徠は古文辭を唱へ、從來、道德、經義に專なりし漢學者の間に、始めて詩文を重んずる一派を生じぬ。徂徠こそその門人太宰春臺、服部南郭とは、實に文藝として見るべき漢詩文を創めたる人といふべし。

(三) 三六一—三五六

古文辭派に對立して、木下順庵の木門あり。初め京都にありて、後江戸に召さる。その學風は唐宋諸家の説を派別せず、なほ詩文をも兼修して、集めて大成するにあれば、門下には和漢古今の書を洽く涉獵したる者多く、新井白石、室鳩巢等の大家をも出せり。今日の普通文たる和漢混淆文も、この派の學者や一度、順庵に師事したりし貝原益軒等の努力によりて大成せしものにして、中にも白石は博學多才、將軍家宣家繼に歴仕して、政務に畫策せるどころ多きのみならず、その識見の卓抜なる、その行文の縱横自在なる、本邦稀有の文豪なり。

(四) 三三七—三六五
(五) 三三八—三九四
篤信 (三) 三九一—三九七

(六) 三九四—三九七
(七) 三九八—三九八
(八) 三九八—三九八

顧みて國學を検するに、足利期の歌學を傳へたりしは獨り細川幽齋のみなりしが、幽齋の門に中院通勝、烏丸光廣、松永貞徳等あり。貞徳の門に北村季吟あり。季吟は諸家の説を集めてその穩健なるものを取り、遍く中古の著名なる文學を注釋せり。今日もなほ廣く行はるる源氏物語湖月抄、枕草子、春曙抄の如きは實に彼の著す所にして、主として足利期傳來の學説を以て成れり。

然るに恰も漢學者間に宋學を排して本文研究を主張する者出でし頃に、國學者の間にも亦獨立研究の説を成せるものあり。所謂古學復興派これなり。下河邊長流、僧契沖は實にこの派の魁を爲せる者なり。時に水戸光圀、修史の志あり。彰考館を開いて大日本史を撰せしめ、兼ねて古典の研究に心を傾けたりしかば、長流の古典に通ずるを聞きて、萬葉集を注せしむ。長流、業を卒へずして歿するに及びて、これを續成せしは即ち契沖が萬葉代匠記にして、總て中古

(九) 三九八—三九八
(一〇) 三九八—三九八
國珠庵 (一〇) 三九八—三九八
(一一) 三九八—三九八

(三三六—三九六)

以來の僻説を排し、全く本文によりて新しき研究を遂げたるものにして、近年の國學はこの書によりて創始せられたりといふべし。契沖より少しく後れて荷田春滿(つねみつ)の別に國學を創始するあり。亦、古典の獨立研究を主張し、儒教佛敎の影響を蒙らざる我が國體と神道とを明かにせむとせり。

以上は主として學問の發達なるが、純文藝の方面に於ても、恰も漢學國學と等しく、元祿期に至つて空前の發達を見たり。

文藝の流行は、當初最も通俗にして入り易き俳諧より起れり。松永貞徳、古學の資を以て、先づ連歌に似て卑俗なる俳諧を始め、西山宗因の談林派はこれを更に通俗自在ならしめしが、元祿に松尾芭蕉出づるに至りて、從來の幼稚なる滑稽諷諷の域を脱して、主として閑寂なる天然を吟じ、ここに新なる俳道を樹立せり。

これより先宗因の門に井原西鶴あり、俳諧より出でて筆を小説

(三三六—三九六)

(三三六—三九六)

(三三六—三九六)

に染む。從來の小説は假名草子と稱する幼稚なる教訓談風のものなりしに、ここに始めて寫實小説成れり。行文犀利、觀察奇警を極めて、よく社會の裏面を穿つ。八文字屋自笑、江島其磧等ついで出でて西鶴を摹倣し、亦一時に鳴れり。

西鶴より少しく後れて近松門左衛門あり、元祿享保の頃に百餘篇の淨瑠璃を作れり。その結構の巧妙、詞藻の豊麗、古今に冠絶して、在來の淨瑠璃はここに全く顧みる者なきに至りぬ。尋で竹田出雲あり、遙に後れて近松半二あり、その作時に門左の壘を摩す。

二、後期 (元文元年—慶應三年)

前期の最盛期たる元祿享保の頃、文化の中心は漸く江戸に遷りて、前期の文豪が主として京阪に出でしに反して、後期の名家は多く江戸に出でたり。

漢學は益、盛にして、寛政に至りては、名高き三學士出づるあり、漢

柴野栗山・尾藤二州・古賀精里。

(三三六—三九六)

(一四〇—一四二)

詩文彌流行せり。又、種種の學派起りて門派の争を生ぜしかば、所謂異學の禁令發せられて、一時は却て漢學の發達を阻礙する感なきにあらずりしが、幕末に至りては、頼山陽・齋藤拙堂・廣瀨淡窓・同旭・莊梁川星巖等、詩に文に、名人の輩出せしこと舉げて數ふべからず。

(一四三—一四五)

元文・寶曆の交に最も目ざましかりしは古學復興派なり。初め、江戸に戸田茂睡ありて和歌の復古を唱へ、ついで荷田在滿・京都より來りて、又、堂上風の歌學を排斥せしが、賀茂眞淵出づるに及びて、その勢力は全く古風を壓し、且つ漢學と對立する勢をなせり。その一派を縣居派といふ。眞淵は春滿の説を敷衍して古道を明かにし、漢學・佛敎の影響を蒙らざりし古に復らむ事を主張し、これが爲に専ら我が國最古の歌集なる萬葉集を研究し、萬葉調の歌を作れり。萬葉考を始として考證・注釋の著書多し。雖も、その才は寧ろ創作にありしが如し。

(一四六—一四八)

眞淵の門下に、近世隨一の學者本居宣長あり。その志一に國體を闡明して外來思想を却くるにあり。その一代の研究は古事記の注釋に集注せられ、國學界無比の大作。古事記傳は成れり。門人に伴信友・平田篤胤等あり。信友は考證に長じ、篤胤は幕末の形勢に促されて、學者よりも寧ろ宗教家又は政事家として、實行家たらむとするに至れり。宣長と同門にして、最も名高きを加藤千蔭・村田春海とす。ともに歌文に專にして、眞淵が創作の才を繼げり。この三人を始として所謂縣居の門流には、學問に詩歌に高才逸足多く、天下靡然としてこれに歸せむとす。

(一四九—一五一)

されど國學者間にも亦別に派を立てて、これと對抗せむとする者も尠からざりき。就中小澤蘆庵・香川景樹が縣居派の好んで萬葉の古調に倣へるに對して、専ら平明なる語句を用ふることを主張したるは頗る注意すべし。景樹は特に歌調の流麗を重んじ、その作

(一五二—一五四)

(二四九—二五〇)

物亦秀拔なるもの多く、門流今に盛なり。これを桂園派といふ。後期の通俗なる文藝にも亦見るべきもの多し。文化の中心の江戸に移ると共に、先づ榮えたるものは、快活敏捷なる江戸氣風によりて成れる、滑稽的小文學にして、俳諧より出でたる川柳あり。蜀山人等の始めたる狂歌狂文あり。小説には青本洒落本の輕妙なるもの専ら流行せり。然るに寶曆より安永天明にかけて國學盛行し、漢學の知識も益流布せしかば、ここに學問の影響は通俗なる文學の中にも著しくなりぬ。

(二五〇—二五二)
(二五二—二五三)
(二五三—二五四)

寶曆の横井也有が俳文は、極めて引喩に富み、學識あるに非ざれば成らざるものなり。天明期に與謝蕪村等出でて、俳諧の復興を企てぬ。その材料は、多くは中古の歌物語にあらずば、漢詩漢文の趣味なりき。又縣居派の門流中より、上田秋成、建部涼岱の如く、和學漢學の素養を以て筆を小説に染むるもの出づるあり。ここに滑稽的寫

(二五三—二五六)

(二五七—二五八)

實に專なりし山東京傳等も古傳説支那小説等を材料としたる讀本合卷などと稱する小説を作り始めぬ。この傾向を大成したる者を曲亭馬琴、柳亭種彦とす。殊に馬琴は博識宏才よく和漢古今の書を涉獵し、且つ略經義に通ぜしかば、その作、一に勸善懲惡を主として、他の小説家の如く筆を野卑なる境に染むること稀なりき。里見八犬傳、椿説弓張月はその傑作にして、我が國小説界の雄篇なり。斯くして當時一般の文藝が學問又は傳説の臭味を帶び來りし間に、依然として滑稽に巧なりしを十返舎一九、式亭三馬とす。三馬の文は輕快にして然も銳利なること、動もすれば西鶴に過ぐ、

(二五九—二六一)
(二六一—二六二)
(二六二—二六三)

天保に入りて文運は稍衰退せり。弘化嘉永に至りては幕末擾亂の世、既に靜に文筆に従ふを得るもの少く、纔に維新の志士等が悲憤慷慨の調時に人心を動かすに足るものあるを見るのみ。通俗なる文藝は益、社會の最下層に媚びて、全く墮落し了りぬ。

一一一 紙鳶の奇計

(一) 高倉天皇の御宇
(二) (八三〇)
(三) 源爲朝の子
(四) 忠僕の子
(五) 大島の郷名

(六) 伊豆國賀茂郡の南端

(七) 島君の生母
(八) 爲朝の末子

(九) 支那漢朝創業の元勳なり。事物

嘉應二年四月下旬島冠者爲頼は、舍弟朝稚と共に大いなる紙鳶を造らせ給ひしが、やがて鬼夜叉を將て野島の館の前裁に出で、これを揚げむとて、同胞風を待顔に心樂しくぞおはしける。
この時爲朝は、豫て朝稚を人知れず下田へ送り遣すべき計策を設けおき給ひてければ、稚子たちが鬼夜叉にかの紙鳶を引揚げさせむとし給ふ時に至りて、獨り前裁に出で給へば、籧江も亦島君を誘ひて、その後方に從ひ出でたり。

かくて爲頼朝稚は父の來給ふを見て、禮儀を正しくし、ほこり近く畏り給ふにぞ爲朝にこやかに打笑みて、わが子供等紙鳶を揚げさするよ。この頃竹を削らせ紙を貼らする由は聞きつるが、偕も大さやかにめでたくぞ造りたる。この紙鳶といふものは、昔前漢の韓

紀原に、韓信晩年に紙鳶を造るとあり。

(一〇) 八幡太郎義家の弟

信が始めて造る所にして、もと敵の城中を見む爲の軍器なり。然れば汝達が翫びとするに、毬打ぶりに勝れり。かく大きやかなる紙鳶に、風箏なくては物足らぬ心地ぞせらる。われよき物を貸すべきに、これを附けよ。と仰せて、腰の間より一管の笛を取り出して、又宣ふやう、これはこれ昔新羅三郎義光深く樂を好み、豊原時元を師として學ぶに、その藝稍熟し、祕曲を傳授するに及んで、時元即ちこの笛を義光に贈れり。抑この笛、樂人の唇を用ひず、吹き來る風の中つる時は、自ら音を發して龍の吟ずるが如し。これ未曾有のものといへども、汝等稚ければ未だ見せざりき。しばらくその紙鳶につけて風箏にせよかし。と宣ひて、朝稚にわたし給ふを、朝稚歡んで受取らむとするに、過つて忽ちはたと取落し、踏石に打當てつ。笛はさつくさ割れしかば、朝稚は言ふも更なり、衆皆色を失ひて、手に汗握るばかりなり。

むは畏けれど、出づるにも入る時も、兄弟三人にて、今日までは暮し
 侍りしに、朝稚なくなり給ひては、翌日より後はなかなかに、慰む方
 もあら海の、そこはかこなく徒に、うら悲しくぞ侍るべき。さればこ
 の爲頼を思ふ儘に鞭うちて、朝稚を許し給へ。それも亦叶はずば、兄
 弟諸共、紙鳶の綱手に引かれて、わたつ海の底の水層となり侍らむ。
 事の起りは爲頼が紙鳶を造らせて、よしなき遊を致せし爲ぞ。かく
 て弟をば失ひ侍る。そも何とせむ、淺まし。さて、己を責めて露ばかり
 も、親を恨まぬ孝行の、同じ思に島君は、いふ事もまだいはけなく、免
 し給へ。とばかりにて、かたみ代りの袖の雨、霽間は更になかりけり。
 之を聞きて、鯨江は友音によよと泣沈み、同胞にておはせばこそ、
 這ふ蟲さへも忌嫌ふ死をだも怖れず、諸共にと誓ひ給へる健氣さ
 よ。いかに猛きが武士の常なればとて情なし。地を走る獸、天飛ぶ鳥
 も、子を思はぬはなきものを、心強くもおはすかな。鯨江が身にかへ

何んとはぢ

0

喰ひつら

て、救はでやは。と怨ずれば、鬼夜叉も涕うちかみ、幼と耄とは罪せず
 とやらむ。十五以下七十以上は罪ありとも免せよといふ、聖の御代
 の掟ぞと、日來言ひしらせ給ひながら、かばかりの過をし給へばと
 て、暑し寒しも漸くに知るや知らざる若君を、千尋の底に沈めむと
 は、物にや狂ひ給ふらむ。いで解きおろし奉らむ。さて走り寄るを、爲
 朝押隔てて大きに怒り、われ十三歳の時より、罪なき者を殺しし事
 なし。いはれなき汝が諫言、無禮なり。と叱り退け、自ら麻絲の端を取
 つて、二三十歩ひき下り、十尺四面の紙鳶をいと軽らかに引揚げ給
 へば、折しも烈しき浦風の卯辰より吹くほどに、下田の方の海面さ
 して、雲井遙に伸してゆくを、索のかざり繰りのばせば、天の河原に
 漕ぐ船か、雲に入る鳥の翼か、見ゆるばかりになりけり。
 あの紙鳶の裏にこそ、朝稚はおはすなれ。思へば無常の風に絶ゆ
 る、今を限の魂の緒ぞと、見上ぐる爲頼、鯨江等は、涙に霞みて茫然と、

眼さへごごかぬ歎せり。

かくて爲朝は、紙鳶の索の端を、赤松の幹に繋ぎとめ、刀をすらりと抜き給へば、なう、淺まし。ごて、能江が袂にすがるを、振拂へば、又、鬼夜叉が楯となる。心も索も張強き、主君の刃の下に立つ、命を惜しまぬ忠臣慈母、妨せそ。ご搔退けて、また、振上ぐる刃尖に、まつはる爲頼島君も、綱手に狂ふ意馬心猿裳に、まつはり伏轉び、親子主從煩惱の絆を断らむ、断らせじごて、その争や君子の徳に、譬へし風もますら男の誓言は違へじと思へば、愈、爲朝は志を勵まして、今ぞわが子の生死の際、源家累代氏の神、正八幡の擁護をもつて、朝稚を恙なく下田の浦に落させ給へご、心の中に祈請しつ、留むる四人を跳り躑えて、閃かす刀ごともに、ふつごきれゆく紙鳶の、上りつ下りつ飄飄ご、雲の旗手にたなびいて、行方も知らずなりしかば、四人は尻居にごうご坐し、あな痛はしや。ごいふ聲ご諸共に啼きて過ぐる。汝も雲間

雲間

の杜鵑、死出の田長の幼子が魂かご見えてあはれなり。

(曲亭馬琴一梅説弓張月)

一三 鴨子と鳧子

本居信仰にて、いにしへぶりの物學びなどすると見えて、物靜に人柄よき婦人二人、各、玉だれの奥深く侍るだらけの文章をやりたがり、几帳のかけに檜扇でもかざして居さうな氣位なり。

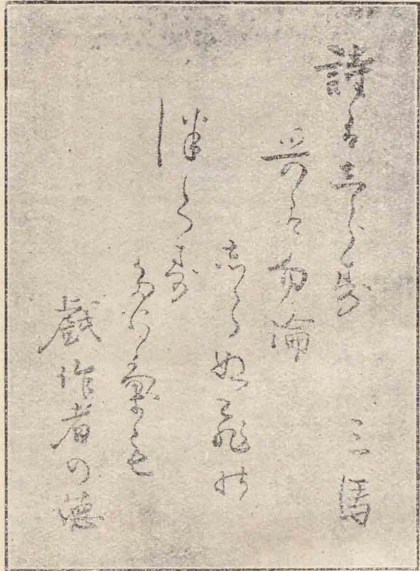
鳧子 「鴨子さん、この間は何を御覽じましたか。」

鴨子 「はい、宇津保を讀返さうご存じて居るところへ活字本を求めましたから、幸に異同を訂して居ります。さりながら、舊冬は何かご用事にさへられまして、俊蔭の巻を半ば過ぐるほどで捨ておきました。」

鳧子 「それはよい物がお手に入りましたね。」

享保五年、武女の作。清水濱臣の標注、村田春海・加藤千蔭の序文を似て、文化六年上梓せらる。

詩はしらべ歌は勿論しらぬひのつくすたはけも戯作者の徳 三馬



式亭三馬筆蹟

鴨子「鳧子さん。あなたはやはり源氏で御座りますか。」
鳧子「左様でござります。賀茂翁の新釋と、本居大人の玉の小櫛をもとに致して、書入れを致しかけましたが、ささびた事にさへられまして、筆を執るいこまが御座りませぬ。」

鴨子「先達てお噂申した庚子道の記は御覽じましたか。」

鳧子「はい、見ました。なかなか手際な事でございます。併し疑はしい事は、あの頃にはまだ開けぬ古言などの遣ひ様に、誤の無い所を見ましても、校合者の添削など少しは有つたかと存ぜられますよ。」

鴨子「何にいたせ、女子であの位な文者は珍しう御座り

類題和歌集、清原雄風編。(文化三年)
加藤千蔭の歌文集

戲吟僧歌、「法師等が鬚の剃り杭に馬つなぎいたくなひきそ法師なからかむ」(萬葉集)

ます。先日も外で消息文を見ましたが、古ぶりの書きざまは、手に入つたもので御座ります。ほんに、怜野集をお返し申すであつた。永永、御恩借致しました。有りがたう御座ります。」
鳧子「いえもう、お緩りと御覽なさりませ。私はうけらが花を一册貸失ひしましたが、ごんご行方が知れませぬ。」

鴨子「いえ、どうも貸失ふので困りますよ。この間はお歌はいかがで御座ります。」

鳧子「何か埒明きませぬ。先日どなたにか承りましたが、あなたはひなぶりをもお詠みなさるさうで御座りますね。」

鴨子「はいさ、もうお恥しいことで御座ります。あまり本歌で退屈いたす時は、慰みがてら誹諧歌を致しますが、なにも、もうお恥しい。お耳に入つては恐れ入ります。」

鳧子「いえさ、萬葉の中にも「法師等が鬚の剃りぐひに」の歌。ええそれ

噓^(一) 啖^(二) 瘦人^(三) 歌、
「石磨にわれは
ものまをす夏瘦
によしといふも
の饅とり食せ」
(萬葉集)

古今和歌集をい
ふ。

いかにしてあり
と知られじ高砂
の松の思はむこ
とも恥し(古今
六帖)

トウモロコシ
シラカバ
ナカクハ
ナカクハ
ナカクハ
ナカクハ

から^(一) 夏瘦によしといふものむなぎごりをせ^(二)のたぐひ、その外あ
また見えますし、殊には續萬葉に誹諧體と申す體が分けられま
したから、無心體の歌もお慰みには宜しう御座ります。

鴨子「いえもう^(三)松の思はむ事も恥し^(四)で御座ります。この間ね、餘りい
やしい題で御座りますが、おかちんを安倍川に致して、さる所で
戴きましたから、ごりあへず一首致しました。

うまじもの安倍川餅は朝もよしきな粉まぶして晝食ふも

よし

と致しました。おほほほほ。

堯子「冠辭を二つたち入れて、至極面白う承ります。まぶして^(一)なごが、
どうか古言のやうに聞えまして、おほほほほ。」

鴨子「いえ、もうほんの慰みで御座ります。先生などのお耳に入つた
ら、お叱り遊ばすで御座りませうよ。」

堯子「なにお前さん、何れ雅の道で御座りますものを、おほほほ。『うま
じもの安倍川』とかかり、あさもよしき^(一)こうけて『晝食ふもよし』ど
うもいへません。おほほほ。あなたお這入りなさりますか。」
鴨子「はい、まづおさきへ。」

と、さくろ口へ入る。(式亭三馬「浮世風呂」)

一四 玉かつま

九五

三五五夏

一、師をよく選ぶべし。

物まなびに志したらむには、まづ師をよく選びて、その立てたる
やう、教のさまをもよく考へて従ひそむべきわざなり。さとり鈍き
人はさらにも言はず、もとよりさとりさき人といへども、おほかた
初に従ひたる方におのづから心は引かるるものにて、その道のす
ぢわろけれど、わろき事を得悟らず、また後には悟りながらも、年來

の習はさすがに捨て難きわざなるに、我がこいふ禍わざ神さへ立ちそひて、こかく強ひごとして、なほ其のすぢを助けむとする程に、遂に善き事は得ものせで、僻事のみして身を終ふるたぐひなど、世に多し。斯かるたぐひの人は、勉めて深く學べば、學ぶまにまに愈よわろき事のみ盛になりて、おのれ惑へるのみならず、世の人をさへに惑はすことぞかし。返す返す、初より師をよく選ぶべきわざになむ。

二、教子にさす たまかつま 三二頁

われに従ひて物學ばむともがらも、わが後に又よき考の出できたらむには、必ずわが説にななづみそ。わが悪しきゆゑを言ひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとすれば、かにもかくにも道を明かにせむぞ、われを用ふるにはありける。道を思はで、徒にわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

三、新しき説 一五 (五〇頁)

近き世、學問の道ひらけて、おほかたよろづのとりまかなひ敏く賢くなりぬるから、とりどりに新なる説を出す人おほく、その説よろしければ世にもてはやさるるによりて、なべての學者、いまだよくも整はぬ程より、われ劣らじと世に異なる珍しき説を出して、人の耳を驚かすこと、今の世の習なり。その中には随分に宜しきことも稀には出でくめれど、おほかた未だしき學者の心はやりて言ひいづることは、ただ人にまさらむ勝たむの心にて、輕輕しく前しりへをも考へ合さず、思ひよれるままに打出づる故に、多くはなかなかなるいみじきひがごこのみなり。

すべて新なる説を出すはいと大事なり。幾度も返さひ思ひて、よく確なる據處をこらへ、いづく迄もゆきとほりて違ふ所なく、動くまじきにあらずば、容易くは出すまじきわざなり。その時にはうけばかりて善しと思ふも、程へて後に今一度よく思へば、なほ悪かりけ

りこ我ながらだに思ひならるる事の多きぞかし。(本居宣長)

一五 雨中石濱の庵にて

葉月二十日あまり秋のけはいの懐しくて例の隅田川のほとり、石濱の庵にゆきて宿りぬ。有明の月のにほひも霧たちわたる曉のさまも處がら世に似ぬものから、此處は雨のそぼふる日なむ殊にあはれは深かりける。もこより萱葺ける庵なれば音だになくて、軒

嶺上雲深
立登る雲より
おくに音する
ははこねの海
のきしの白な
み千蔭



蹟筆蔭千藤加

の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水の面は動くこともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き淡きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ雨

のけはひはしるかりけれ。みをの一筋はさしひく汐にもまじらで、こはに縹の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ちくるならむ。打向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは流石にほのかに見えて、そのひまひまより長き隄の見えわたるに、隄のをちなる梢は、やうやうに薄墨もてかきけちたらむ如く、いとしもはるけきは、只なびかぬ煙ごのみぞ見ゆる。此處彼處より鳥の飛びゆきつつ、時の鷺の翼重げに起きいでて、川の瀬の眞菰におり立てば、みさごの羣れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横たへ、手をこまぬきて思ふこともなげに居り。筏は水のまにまに流れゆくも静けし。渡守、舟さし出せば、大笠傾けて渡りゆく人の、やがて隄をあるくさま繪にもよく似たり。すべて一日の中に、筑波嶺より吹風すかと思へば、沖よりも風かよひ來て、岸の木立も長き隄も、あ

るはあらはれあるはかくれて限なき青海原に向ひたらむやうに
覺ゆる折もありけり。かくて、やや夕暮近くなりゆけば、羣鳥のおの
がじし時求むるに、雁の一つら二つら渡りゆくなど、得も言はむ方
なし。暮れはててもなほ逝く水の色のみ遠白く残りて、川添小田に
いはへる水分みづまの神の御燈の海士の漁いしとも言ふべく、かすかに見え
わたるもあはれなり。

秋ふけて小さめそぼふる隅田川たが墨がきのすさびなる
らむ (加藤千藤—うけらが花)

一六 芳宜園大人の靈を祭る

ここに文化の五ごとせ九月八日、平春海謹みて芳宜園よしぞのの大人のお
くつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、う
なねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君は吾に十とといひて一ひととせ

加藤千藤 文化
五年九月二日歿す。

賀茂眞淵

青田亂蛙
なりかこふみ
どりの竹のか
きつ田にすた
くかはつのと
ゑそへたてぬ
春海

のこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はま
さにさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に
縣居ごほの庭に物學びにゆきかひたる時、あしたにまゐることには君の
みはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるとしては君の御袖のもこ
に縫ぬいりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異な

青田 亂蛙
なりかこふみ
どりの竹のか
きつ田にすた
くかはつのと
ゑそへたてぬ
春海

讀筆海春田村

らむ。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作ることには吾をおとご
ひのつらにぞ教へ給ひける。

中ごろにして、君は仕への道に暇なくおはし、吾は世のさがにか
かづらひて、おのづから疏き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給
ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべを

なし、月を思ふとは君が舟に相乗り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふる業のまめごともあだごとも、かたみに隔なく心をはせつること今にはたさせ、その初を繰返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを、今おくれたてまつりて、いつの世にか相見む、いづれの時にかこととはむ。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらむ、かかるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも、文の林世世に衰へ、言の葉の道日日に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機の文あるみやびごを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥み、ここにひかれて、尙あやしみがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相う

宋人有^二耕^レ田者^一、田中有^レ株、兔走觸^レ株、折^レ頸而死。因釋^二其耒^一而守^レ株、冀^二復得^レ兔、兔不可^レ復得^一。而身爲^二宋國笑^一。(韓非子)

其劍自^二舟中^一墜^二于水^一。遂刻^二其舟^一曰、是吾劍所^二從墜^一也。舟止、從^二其所^一刻處^レ入^レ水、求^レ之、舟已行矣、而劍不行。求^レ劍若^レ此、不^二亦惑^一乎。(呂氏春秋)

づなひ、遠き人は遙に靡き來て、古ぶりの歌世に盛りになりたるなり。

そのみづから詠みいで給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿ざりざりに備はらざるはなし。その古を寫せるは藤原寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河鳥羽の御時に下らず、心に思ふ事は口に盡さざることなく、目に觸るるものは言葉にのせざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきもめでたふさまざる人なし。又事好みの人、その名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひこ歌を得ては、價なき寶にもかへじこいひてぞ深く喜びける。

然るを、今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世の人の憂さもいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かかるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲し

きかもわが斯くことあげするを泉の下にもさやかにきこしめし、
天翔りても遙に見そなはせとなむ申す。(村田春海一琴後集)

一七 那須野

下河邊長流

下野や那須野にしげる篠をとりてあづまをのこは矢
にぞ矧ぐなる

釋 契 沖

初瀬のや里のうなるに宿こへば霞める梅のたち枝を
ぞ指す

荷 田 春 滿

ますらをや折にふれては猛り猪の猛きこころのなご
なかるらむ

もろこしの人
に見せはやみ
よしののよし
野の山のはな
のさかりな
賀茂眞淵

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷺の翼もたわに吹くあらし
かな

賀 茂 眞 淵

もろこしの人に見せはやみよしののよし野の山のはなのさかりな
賀茂眞淵

賀茂眞淵筆蹟

思ほさぬ隠岐のいでまし聞くときは賤の男われも髪
さかだつを

本 居 宣 長

隅田川みのきてくだす筏師にかすむあしたの雨をこ
ぞ知れ

加 藤 千 蔭

○ 村田春海
こころあてに見し白雲は麓にて思はぬ空にはるる富士のね

○ 加藤美樹

○ 加藤美樹
もののふの草むす屍としふりてあきかぜさむし桔梗が原

○ 清水濱臣

○ 清水濱臣
窓の桐かきねの柳ひとは散りふた葉みだれて秋風ぞ吹く

○ 香川景樹

山家初雁
山さとにけさ
わたり来てう
つ蟬のうきよ
に住うかりと
鳴也 景樹



香川景樹筆蹟

○ 熊谷直好
富士のねを木のま木のまにかへりみて松のかげふむ
浮島が原

○ 熊谷直好

○ 熊谷直好
うちしきる麓の里の雞が音に明けこそわたれ三保の松原

○ 加納諸平

○ 加納諸平
雲かかるわたのみなかに荒潮を雨と降らせて鯨うかべり

○ 大隈言道

○ 大隈言道
咲く花に遊ぶを見れば鳥だにも食むここのみは思はざりけり

○ 橋曙寛

○ 橋曙寛
たのしみは秋米櫃に米いでき今ひとつきはよしとい

ふらさ

八田 知紀

○ 網引する舟の夜さむを身にしめて寝られぬ妻やころも擣つらむ

井上 文雄

○ よひよひの卯の花月夜ほとこぎす田舎ははやく夏めきにけり

太田 垣蓮月

○ 野に山にうかれうかれて歸るさを聞まで送る秋の夜の月

一八 讀書の意義上

世の中には極めて平凡で陳腐な問題で、而も時時振返つて之を

考へ直して置かなければならない性質のものがある。讀書の意義といふことも、世人の多數にとつては、恐らくこの類の問題の一つであらう。讀書は誰でもすることであるが、大多數の人はその意義と利弊とを考へてゐない。併し文化の進歩に従つて、讀書慾が急速に高まるに伴れ、又讀書の態度が眞劍の度を加へるに伴れて、この問題をはつきり考へて置く必要を益々痛切に感ずる。

讀書は體驗を豫想する。自ら眞劍に生活し、眞劍に思索してゐる人にとつてのみ、讀書は効果がある。讀書は吾吾の思索と體驗とを補ふことは出来るが、之に代ることは出来ない。讀書の意義を考へる時、吾吾は第一にこの事を牢記して置かなければならない。

若し人が一冊の書でも之を本當に理解しようと思ふならば、唯之に齧り着いたり、之を睨めつくらをしたりしてゐるべきではない。假令その人が之を讀返し又讀返して、一生その書を手から離さ

ないにしても、若しその書の根本問題を自己の問題とすることを知らず、その書の背景になつてゐる人生の體驗を自ら體驗することを知らず、又著者の思索の努力を自己の中に繰返すことを知らないならば、唯、小僧のお經を誦む時のやうに、その書を誦誦するのみで、その人の生活はこれによつて豊富にも力強くも高くもなる筈がない。寧ろ無用の記憶は彼の頭腦を硬くして、讀書は平生の馬鹿を一層馬鹿にするに過ぎないであらう。讀書の意義を考へる者は、先づその價值の限界を考へなければならぬ。吾吾にとつて最上の意義を持つてゐるのは生活であつて、決して讀書ではない。この間の關係を轉倒して、讀書に無條件の價值を置くのは、寧ろ讀書からその正當な價值を奪ふ所以に過ぎないのである。

この事は理科の書にも、家政の書にも、料理の書にも、等しく適用される。自然現象に對する觀察と實驗、家庭の實際生活に於ける苦

心と活用、臺處に於ける調理と食卓に於ける玩味、かういふやうなことを始終念頭に置きながら、書物に書いてあることを確めたり批評したり、訂正したり、運用したりしないならば、讀書は唯暇つぶしの道樂になつて了つて、その知識は何時まで本當に自分のものとなることがないであらう。就中、自分の生活と體驗とに照して、根柢から之を吟味する心掛こまかの特に必要なのは、哲學や文藝に關する書である。かう云ふ種類の文獻の中に取扱はれてゐるのは、無形の眞理か、人心の機微かである。この場合には、吾吾は理科や料理の書の場合のやうに、之を實驗に徴すべき有形なものを持つてゐない。時代の推移や人間の心理は、社會現象の考察や他人の喜怒哀樂の表情の觀察に徴して、書物に書いてある事の眞偽を判斷することが出来るのは勿論であるが、この場合、その根據になつてゐる社會現象の意味、他人の表情の意味は、結局自分自身の内面的體驗を

基礎としなければ解釋の出来ない筈のものである。随つて吾吾は、唯深く自分の内面を省みる事によつて、書かれてある事の眞偽を判定するより外はないのである。平生自ら體驗を深める努力もせず、自ら思索し自ら内省する習慣をも作つて置かない者は、書を讀んでも本當の意味を理解することが出来ず、唯徒に之を記憶するか、若しくは盲目的に之を信仰するかに過ぎないであらう。併し充分に理解されぬ記憶の集積と、腹の底から得心の行かぬ盲目的な信仰とは、吾吾の生の流動を妨げる石塊のやうなものである。之を持つことが多ければ多い程、吾吾の生活は之がために壅塞されるのである。

吾吾の生活の發展の最初の地盤となり、吾吾の思索の第一の出発点となるものは何であるか。それは吾吾自身の體驗である。吾吾自身の體驗の外には何物もある事を得ない。吾吾の最初の體驗は固より完全なものではないが、その中に隠れてあるものを明るみに引出し、その中に潜んである矛盾と戦を重ね、その中に具はつてある内面的傾向を次第に推進めることによつて、吾吾の生活は始めて發展し、吾吾の思索は始めて眞理に接近する。若し吾吾が吾吾の生活に關する眞理の標準を、例へば物理學に於けるが如く、自己以外に固定した尺度に求めるならば、吾吾は何時まで経つてもそんなものを發見することが出来ないであらう。吾吾は永遠にただ與へられたものを盲信するか、若しくは永遠に懷疑の淵に沈んでゐなければならぬであらう。輕信と懷疑とは雙生兒である。なきものがあるとき考へるのは輕信である。眞理を求めるのに、最初からそれが無いときまつてゐる方面を搜し廻つて、永久に無い無いと言つて騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上にその思想の根柢を築かうとしてゐる點に於ては、兩者共に同様である。生活に於ても、思

索に於ても、假初にも堅實な歩を始めようとするならば、吾吾は自分の體驗を信じて、之を學び知らなければならぬ。讀書の價値も亦この信念の上に立つて、始めて發揮されるのである。

この信念を基礎としない時、讀書は吾吾にどのやうな弊害を與へるであらうか。第一に、それは善惡美醜、正邪に對する純朴な本能を紊して、之を混亂させ、之を麻痺させる。全然文字を知らぬ田夫野人が、半可通の讀書子よりも人情の美醜を解し、善惡正邪に對して彼等一流の判斷を持つてゐるのは、彼等が兎に角讀書によつて迷はされない本能を持續してゐるからである。第二に、體驗の根柢を缺いてゐる讀書は、吾吾の思考力を薄弱にする。吾吾は雑多な意見を聞きかじることによつて、自分自身の判斷のない人間にされて了ふ。さうして第三に、吾吾は前に言つたやうな種種の理由によつて、結局吾吾の生活そのものの統一を奪はれ、生活そのものの力を

失ふやうな恐しい破目に陥る。吾吾の生活には、踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべき出發點もないものとなつて了ふ。この點に於て、誤れる讀書によつて現代の生活が如何に損はれてゐるか、他人事ならぬ吾吾自身の問題として、吾吾は深く省みる所がなければならぬ。吾吾は農夫や職工の無學を嘲る前に、先づ多少の學問によつて、却て自分自身が馬鹿になつてゐるやうな事はないか。云ふことを考へて見る必要がある。生活の狭い事は決して喜ぶべきではないが、狭くても自分の生活を持つてゐる者は、凡そ自分の生活を持つてゐない者よりも遙に優つてゐる。

併し粗野から産れたものよりも、教養ある敏感から生れたものの方がよいことは言ふまでもない。無知は吾吾の生活を狭くし、吾吾の思想を偏らしめ、吾吾と他人との交通を困難なものにする。吾吾が、最高の度まで吾吾の中に潜んでゐる力を發揮しようとする

ならば、他人の體驗を通して、自分の局限リミットされた一生の中に觸れ得ないやうな體驗をも味ひ、他人の思索によつて自分の思索を豊富にし、かくして一人の生涯の中に千萬人の生涯を攝取することを心掛けなければならぬ。決して自分自身の中にのみ閉籠るべきではない。茲に於て讀書の意義は甚だ重大なる書を読むと讀まぬとは、第一義に於て人間の價値を左右するものではないが、それは深く人間の價値と關係して、その向上を大いに助ける。正しい道さへ踏外さないならば、書物は讀めば讀むほどよいものである。さうして讀まなければ讀まないほど悪いものである。

ただ讀書の意義は吾吾の體驗を基礎としてのみ成立つものであるとすれば、どんな良書も、此方の體驗が足りない限り、十分に理解することが出来ないのは止むを得ない。特に偉人がその一生の體驗と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾吾の體驗と

思索とが大きくなればなるほど、何處までも益、大きく見えるであらう。幾度讀みかへしても常に新しい味を吾吾に味はせるであらう。この意味に於て、吾吾が本當に良書を理解しようと思ふならば、吾吾は先づ自分自身の生活を大きくしなければならぬ。吾吾が全力を盡して考へたり味つたりしても、とても理解し得ないやうな書に遭遇したならば、吾吾は暫くその書を離れて直接の人生に歸つて行くがよい。さうして其處で得たものを携へて、適當の時期を見計らつて再び書物に對ふがよい。その時吾吾が直接の人生から携へて來たものは、その書物を理解するために大いに裨益することがあるであらう。自己の成熟を待たずに、無闇に之にかじり着くのは極めて愚策である。自然科学の知識の根原が自然にあるやうに、人間智の根原は凡て直接の人生にあることを忘れてはならない。

書を読むとは心を読むのである。自己の心を読むことを知らぬものが、どうして他人の心を読むことが出来よう。

一九 讀書の意義下

一つの書を本當に理解するためには、吾吾は其處に書かれてある世界に根本的に同化する力を有つてゐなければならぬ。自己の氣まぐれを全く殺して、十分に他人の立場に同化する^{こと}は、吾吾にとつて非常に困難なことである。併し如何に困難であつても、吾吾は、この道を通らずには、本當に他人の心境に徹^{する}ことが出来ない。積極的に言へば同化であり、消極的に言へば自己の氣まぐれを殺すことである。これが讀書の第一義諦である。根本原理

大切

實に讀書の眞髓は書中の世界に同化することにある。併し、讀書に於ける同化の意味を正當に理解して置かないと、吾吾は此處

でも亦讀書によつて大害を受けらるであらう。讀書とは、譬へば夢に富士山に登るやうなものである。それは正夢であつて、吾吾の夜毎に見るやうな繁れた取留めののないものと同日の談でないことは勿論であるが、とにかく吾吾が讀書によつて偉大な世界に同化すると云ふことは、決して吾吾の生活の全體が永久にその高みに攀登つてゐるといふ證據にはならない。その夢が一度醒めれば、依然として麓に彷徨する憐むべき俗界の子に過ぎないのである。固より讀書の正夢は吾吾の登攀の志を刺戟し、登攀の途を吾吾に教へ、且つ夢を見ることそれ自身が少しづつ吾吾の現在の立場を高めて行くのであらう。併し、登攀の志を全くするには、吾吾は自己の生活を提げて、實際登山の困難と戦つて行かなければならない。一夜の夢によつて直に一萬二千尺の高處に立つことに安んぜず、一尺二尺と登攀の工夫を積んで、自己の生活の全體を一萬二千尺の

高處に引上げなければならぬ。山頂に立つ夜毎の夢をも、譬へば夢に聖人を見る人の場合に於けるが如く、吾吾の切なる向上の志の一つの象徴にしなければならぬ。

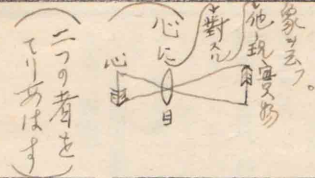
讀書は、往往この向上の志を甘やかして、幻を以て眞實に代へる危険に陥らしめる。而もそれは、その書に籠る力が強烈であればあるほど、又その書の表現が成功してゐればあるほど、益甚しいであらう。書中の精神が最初から力強く讀者を擱んで、驚のやうに蒼空に飛翔する時、若しくは其處に自然なならかな道が準備されてゐて、知らず識らず人をその世界に導き入れるだけの旨さがある時、吾吾は勞苦を知らずに書中の世界に同化して了ふ。さうして其處が最初から自分自身の領分であつたかのやうな錯覺に囚はれる。さうした錯覺が、彼が最も完全に著者に引きずり廻されてゐる證據であるにも拘らず、彼はこの他奇なき世界を表現せる著者を

侮るやうな眞似をさへ敢へてするのである。併し、創り出す者との味ふに過ぎぬ者との間には、最初に道を拓く者と他人の拓ける道を行く者との間と等しい間隔がある。他人の苦心して拓ける道を疾驅して、その速さを誇る者は、精神生活の道に於ては、時に愚なる驕兒である。何となれば、精神の生活に於ては、本當に歩むとは、常に自分の道を拓いて歩むことではないからである。吾は讀書によつて往往この嚴肅な事實を忘れる。他人の足で歩かうとする惡癖を増長させる。寧ろ、他人が歩いてゐるのを見て、自分が歩いてゐるのだと妄信する幻覺に囚はれる。世の中には、自分が讀んだ書の權威を笠に着て、自分自身が偉い人であるかのやうに威張つてゐる連中がどんなに多いことであらう。併し、彼がそんな風に威張つてゐるといふことは、讀書の魔道に墮ちてゐる證據である。吾吾は讀書を愛すれば愛するほど、この魔道に陥ることを避

けなければならぬ。

茲に於て必要となるのは比較の見地である。一旦同化した書中の世界を嚴正に自己の現實と比較して見ることである。書中に於て見る登高の夢と比較して、自己の現在の立場の低さを反省することである。不斷にこの努力を持續けることによつて、吾吾は始めて「浮かさず」に書を読む事が出来るであらう。この態度は二つの方向に於て吾吾の讀書の生活を深める。一つには、それは自ら著者の製作の心境に對する吾吾の洞察を深くするであらう。彼は如何にしてこの偉大に到達したか。此の如き花を咲かせるために、彼は如何にしてその根と幹とを育てたか。これ等の事が吾吾の注意を要求する。眼光紙背に徹す。といふ境涯は、恐らくこの道によつて始めて獲得されるのである。二つには、讀書と生活を一層密接に連絡させる。この道によつて讀書は始めて吾吾の生活の根柢を衝く力

對象 對照



となる。讀書は吾吾の生活する精神的雰圍氣の重要な一要素として、師長や朋友と同様の位置を占める。偉大なものとの接觸と比較とによつて、吾吾の生活は深く刺戟される。特に地方に無刺戟な生活を送つてゐて、直接精神的雰圍氣を持つことの比較的少い人達にとつては、讀書によつて自己の周圍に豐醇な空氣を創り出すことが必要である。それをしなければ、恐らく吾吾は知らず識らず居睡の習慣の虜となるであらう。

併し比較の道にも亦一つの危険がある。自らその方面の野心を持つてゐる者は、特にこの危険に陥り易い。その危険とは、同化するに先立つて力競べをしようとする誘惑である。靜に對照が與へるところのものを読む前に、空虚な興奮に身を委ねることである。かくて都會生活をなすものの焦燥と神經質とは、又野心に燃える讀書家の心をも蠱毒する。何だこんなものを。と思つたり、とても叶

戸かわくべからぬ文武兼備の進士の垂迹げにちはやぶるかみ幟
仰げばいよいよ軒に高し。

鬼すまぬわがおほぎみの國なれば鍾馗の劔のぬきがひも
なし(宿屋飯盛一東なまり)

二二 幻住庵の記

石山の奥巖間のうしろに山あり國分山といふ。そのかみ國分寺
の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて翠微に登る事三曲、二
百歩にして八幡宮たたせ給ふ。神體は彌陀の尊像としかや。唯一の家
には甚だ忌むなる事を、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも
亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いと神さびもの靜なる
傍に住捨てし草の庵あり。葦根笹軒を圍み、屋根洩り、壁落ちて、狐狸
ふしどを得たり。幻住庵といふ。主の僧某は勇士菅沼氏曲翠子の伯

(二) 膳所藩士本多八左衛門、探山居士。
(三) 芭蕉の門人。

(三) 四十六歳。(元祿二年)

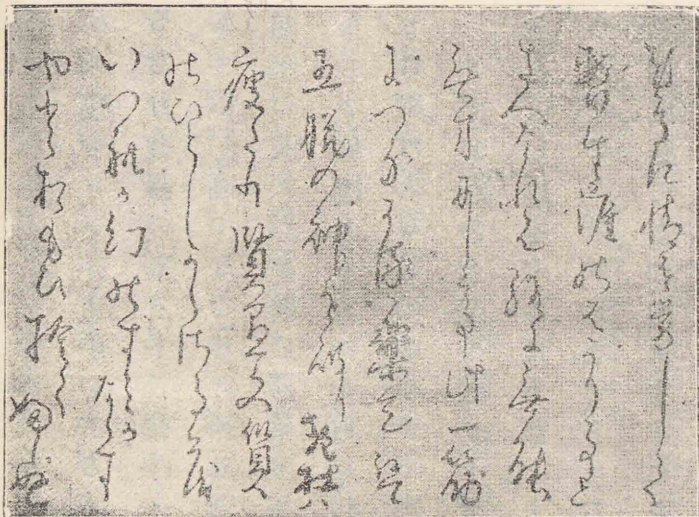
(四) よしの山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人やまつらむ(僧西行)
(五) 昔開洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南拆。乾坤日夜浮。(杜甫)
惠宗烟雨歸雁。坐我瀟湘洞庭。欲喚扁舟歸去。故人道是丹青。(山谷集)

父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名のみ残せり。予亦市中を去る事十年ばかりにして、五十年にやや近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなご歩み苦しき北海の荒磯にきびすを破りて、今歲湖水の波に漂ひ、鳩の浮巢の流れとどまるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端ふきあらため、垣根結ひそへなごして、卯月の初、いさかりそめに入りし山のやがて出でじとさへ思ひそみぬ。
さすが春の名残も遠からず、つつじ咲残り、山藤松にかかつて、時鳥しばしば過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、木つつきのつつくとも厭はじなご、そぞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よき程に隔たり、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡の山比良の高根より唐崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るる舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、

(二) 田上山麓に猿丸
大夫の墓ありと
無名抄に見ゆ。

(三) 除老海棠巢上。
王翁主簿峯庵。
(山谷集)

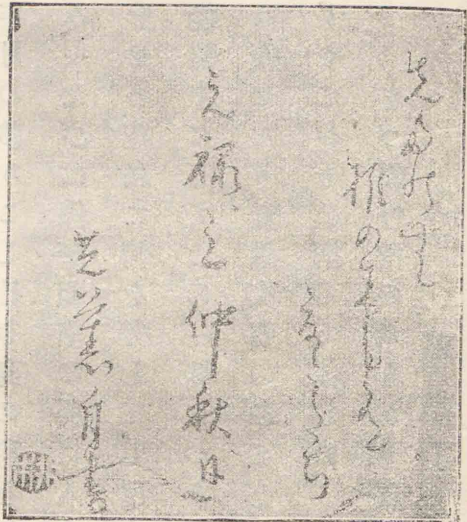
(三) とくとくと落つ
る岩間の苔清水
汲みほすほども
なきすまひかな
(僧西行の歌な
りといふ)



松尾芭蕉筆蹟

麓の小田に早苗こる歌螢飛びかふ夕闇の空に水雞のたたく音美
景物として足らずといふ事なし中にも三上山は、士峯の佛に通ひ
て、武藏野の古きすみかも思ひ出
でられ、田上山に古人をかぞふな
ほ眺望限なからむさうしろの峯
に這ひあがり、松の棚つくり、藁の
圓座を敷いて、猿の腰掛と名づく。
かの海棠に巢を營み、主簿峯に庵
を結べる王翁除佞が徒にはあら
ず。ただ睡癖山民となりて、辱顔に
足をなげ出し、空山に虱を捫つて
坐す。たまたま心まめなる時は、谷
の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくと

(四) 藤木甲斐守敦直、
寛永時代の能書
なり。



(幻住庵の記)

くの筆を侘びて一爐の備いとか
ろし。はた昔住みけむ人の、殊に心
高く住みなし侍りて、たくみおけ
る物ずきもなし。持佛一間を隔て
て、夜の物をさむべきところなど、
いさかしつらひたり。さるを筑紫
高良山の僧正は賀茂の甲斐某が
子にて、このたび洛に上りいまそ
かりけるを、或人して額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、幻住庵
の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅
寝といひ、させる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑、か
り、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれまれのぶらぶら人人に心を動か
し、或は宮守の翁、里のをのこども入り來りて、ゐのししの稻くひあ

らし、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日既に山の端にか
かれば、夜座靜に、月を待ちては影を伴なひ、燈を取つては罔兩に是
非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむこ
にはあらず。やや病身人に倦んで世を厭ひし人に似たり。つらつら
年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨
み、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身
をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計さへなれば、終に無
能無才にして、この一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜
は瘦せたり。賢愚文質のひこしからざるも、いづれか幻の栖處なら
ずやとおもひ捨ててふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり夏木立(松尾芭蕉)

支那唐代の詩人
白居易
支那唐代の詩人
杜甫

二二 筆のすさび

一、あだし野の露

あだし野の露、きゆる時なく、鳥部野の畑たち去らでのみ住みは
つるならひならば、いかにものあはれもなからむ。世は定めなき
こそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべ
を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をく
らすほどだにも、こよなうのどけしや。

飽かず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢のここちこそせ
め。住みはてぬ世に、みにくき姿を待ち得て何かはせむ。命長ければ
恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそ、目やすかるべ
けれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出で交らは

むことを思ひ、ゆふべの日に子孫を愛し、榮ゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、ものあはれも知らずなりゆくなむあさましき。

一、しづかに思へば

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞ、せむ方なき人静まりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたため、残し置かじと思ふ、反古などやり棄つる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、ただその折のこちすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心なくてかはらず久しき、いとかなし。

二、人のなきあと

人のなきあとばかりかなしきはなし。中陰のほど山里などにう

佛教にて人の死後四十九日の間をいふ。

三、四十九日の最終の日。

つろひて、便りあしくせば、き所にあまたあひゐて、後のわざごも營みあへる、心あわただし。日數の早く過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいとなさけなう、互に言ふ事もなく、われかしこげにも、したため、ちりぢりに行きあかれぬ。もこの住家に歸りてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかじかのことは、あなかしこ、あこのため、思むことぞなぞ言へるこそ、かばかりのなかに何かはこ、人の心はなほうたておぼゆれ。

三、去者日以疎、生者日以親、(文選)

四、梵語、圓塔と譯す。死者の冥福を祈るため其の墓畔に立つる圓塔の形にけづりたる板。

年月経てもつゆ忘るるにはあらねど、去るものは日日にうとしといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりはおぼえぬにや、よしなしことなどいひて、うちもわらひぬ。からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつつ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふりうづみて、夕の嵐、夜の月のみぞ、ことこふよすがなりける。

古墓何代人。不知二姓與名。化為二路傍土。年年春草生。(白氏文集)
古墓翠爲田。松柏摧爲新。(文選)

思ひ出でてしのぶ人あらむほどこそあらめ、そも又ほごなく失せて、聞傳ふるばかりの末末は、あはれこやはおもふ。さるはあごふわざも絶えぬれば、いづれの人こ名をだに知らず。年年の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれとも見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪に摧かれ、ふるき墳は鋤かれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。(吉田兼好「徒然草」)

二三 末葉のやどり

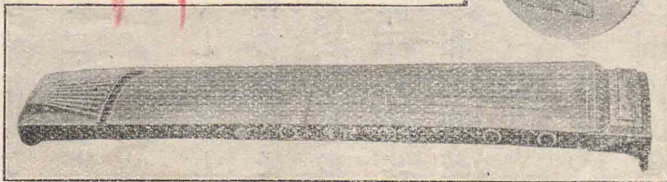
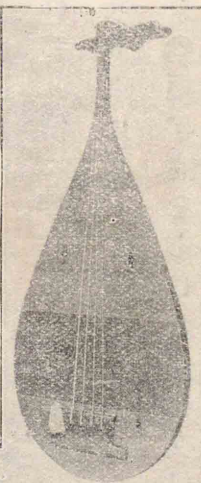
爰に六十の露消え方に及びて、更に末葉のやどりを結べるこころあり。いはば狩人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し。これを中頃のすみかにならずらふれば、又百分が一にだにも及ばず。ごかくいふ程に、齡はごしごしにかたぶき、すみかは折折にせばし。その家のありさま世のつねならず。ひろさはわづかに

方丈、たかさは七尺がうちなり。處を思ひ定めざるが故に地を占めて造らず。土居をくみ、打ちおほひを葺きて、つぎめ毎にかけがねをかけたなり。もし心に適はぬ事あらば、やすく外に移さむがためなり。その改め造る時、いくばくの煩がある。積む所わづかに二輛なり。車の力をむくゆる外は、更に用途いらす。

いま日野山の奥に跡をかくして、南にかりの日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。彼の帳のこびらに、普賢ならびに不動の像をかけたなり。北の障子の上には、ひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集ごごきの抄物をいれたり。傍に琴琵琶おのおの一張を立つ。いはゆる折琴、繼琵琶これなり。東にそへて蕨のほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、爰に文机を出せり。

山城國宇治郡

枕のかたにすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなるひめ垣をかこひて園とす。すなはちもろの薬草を栽るたり。假の庵のありさまかくの如し。



繼 琵琶 と 折 琴

その所のさまをいはば、南に竈あり、岩をたたみて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど西は晴れたり、観念のたより無きにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く、かたらふごごに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳に満てり、空蟬の世を悲しむかこきこゆ。冬は雪を憐む、積

(一) 世の中を何にた
とへむ朝ぼらけ
漕ぎゆく舟のあ
との白波(拾遺
集、滿誓沙彌)
(二) 滄陽江頭夜送客
楓葉荻花秋瑟瑟
(白樂天)
(三) 桂大納言源經信
琵琶の妙手にし
て、その流を桂
流といふ。
(四) 樂の名。
(五) 琵琶の秘曲。

り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業をさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡のしら浪に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らすゆふべには、滄陽の江をおもひやりて源都督のながれを傲ふ。もしあまりの興あれば、しばしば松のひびきに、秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれど、人の耳を悦ばしめむごにもあらず、獨りしらべ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

大かた此處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今までに五年を経たり。假の庵もややふる屋となりて、軒には朽葉深く、土

居に苦むせり。おのづから事の便りに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ盡してこれを知るべからず。たびたびの炎上にほろびたる家またいくそばくぞ。ただ假の庵のみのごけくしておそれなし。ほど狭しさいへども、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身をやどすに不足なし。がうなはちひさき貝をこのむ、これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る、即ち人を恐るるが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れば、願はずまじらはず、ただ靜なるを望し、愁なきを樂しみとす。總て世の人の住家を作るならひ、かならずしも身のためにはせず。あるは妻子眷屬のために作り、あるは親昵朋友のために作る。あるは主君師匠および財寶馬牛のためにさへこれをつくる。我今、身のためにむすべり、人のために作らず。ゆゑいかなとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふ

べき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣く作れりとも、誰をかやどし、誰をかすゑむ。

それ人の友たる者は富めるを貴み、懇なるを先とす。かならずしも情あると直なるをば愛せず。ただ絲竹花月を友とせむには如かじ。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく閑なるをば願はず。ただ我が身をやつことするには如かず。もしなすべきことあれば、則ちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人にかへりみるよりはやすし。もしありくべき事あれば、みづから歩む、苦しさいへども馬鞍牛車と心を悩ますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手のやつこ、足の乗物、よくわが心にかなへり。心また身の苦しみを知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてまたたびたび過さず、ものうしとて心も動かす事な

し。いかに況や、常にありき、常に動くは、これ養生なるべし、何ぞいたづらにやすみ居らむ。人を苦しめ人を悩ますはまた罪業なり、いかに他の力を、かるべき。

おほかた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく、恐もなし、命は天運にまかせて惜しまず、厭はず、身をば浮雲にならずらへて、頼まず、まだしこせず。一期の樂しきは轉寐の枕の上にはまり、生涯の望は折折の美景に残れり。(鴨長明「方丈記」)

二四 鎌倉室町時代の文學

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體ここに一變す。公卿は政權を失ふと共に、意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども、文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し、困憊して、生活に餘裕なし。随つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、また己むを得ざる所なり。

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體ここに一變す。公卿は政權を失ふと共に、意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども、文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し、困憊して、生活に餘裕なし。随つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、また己むを得ざる所なり。

當時専ら武家の祐筆となり參謀となりて、文筆に従事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くはその手に成れり。さればこの時代の文學に佛敎的傾向の存すること平安朝より甚しく、到る處に無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は、社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰、會者定離の觀念の深く、人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。

漢學は漸く衰へ、上流の人も多くは純粹なる漢文を書き得ず、ここに和漢混淆の一種特別なる文體を生ぜり。この文體を以て記したるものにして、最初に成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は源平の紛争たえまなき世を厭ひて、山城の日野に隱棲せることを記せる鴨長明が短篇にして、文辭の流暢を以て顯る。

更に和漢混淆體の大いに光彩を放ちたるは源平争鬪の次第顯

短い著作

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體ここに一變す。公卿は政權を失ふと共に、意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども、文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し、困憊して、生活に餘裕なし。随つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、また己むを得ざる所なり。

末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものをして、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらむ。ここに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元平治の兩物語にして、共に簡勁を以て優れたり。ついで出でたる平家物語は、蓋し曲節を附して諷誦せむが爲に作られしものなるべく、縦に雄大、悲壯なる戦記を以て貫き、横に哀憐、優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄、奥妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名殘に、壽永の秋を西國さして、落ちゆける、夢よりもはかなき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言言涙あり、句句同情あり、讀む人をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて、佛道に歸入せしめずんば、己まざらむとす。その冒頭を「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す」といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への御物語に、其の經過せる御一生

源平二氏
の事
に
知
り
難
い

を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。源平盛衰記は、平家物語に比してその記事更に詳密なり。文章頗る華麗にして、漢語を交ふること平家より遙に多し。太平記は平家物語に倣ひて作れるものにして、後醍醐天皇の御即位に筆を起し、爾後五十年間の戦亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げ、數多の忠孝節義の士の事跡を點綴して、其の間に倫理的、宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢字を用ふることに更に著しく、文脈はた漢文調を加へたり。

此等のものと稍その趣を異にし、率直平易なる文體にて書ける散文に、十訓抄、古今著聞集、宇治拾遺物語あり。何れも古來の面白く珍しき事實を輯めたり。

徒然草は兼好法師の作にして、その趣味を談じ、世態人情を説く間に、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虚飾を

源平二氏
の事
に
知
り
難
い

透して隠れたる社會の裏面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾撞着のあるところを暴露せり。文章も亦暢達にして雅馴交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて、世に隨筆の雙絶と稱せらる。

此の外、歴史としては神皇正統記、増鏡等最も見るべし。神皇正統記は北畠親房の著にして、建武中興の業破れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るころ、即ち名分の存するころなるを疾呼せるものなり。これ實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、婉曲なる字句のうち、博大なる氣格を藏して、堂堂としてまた朗朗たり。増鏡は後鳥羽天皇御即位の初より後醍醐天皇の隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事は客觀的にして、毫も著者の主張を交へず、文章また流麗なり。

この
可なり
と云ふ

キ
ある
可
なり

又波

和歌はその初期に於て最も盛にして、元久二年には、後鳥羽上皇の旨により、藤原家隆、同定家等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の敕撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に優れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敍景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしものといふべく、句調流麗、その新奇なること前古無比と稱せらる。隨つて當時有名なる歌人亦少からず、まづ俊成あり、西行あり、寂蓮あり、關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を作る。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜ばば、後者は最も暢達の調を尙べり。

室町幕府の世になりては、戰亂相繼ぎて、干戈相見えざる日ごてはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らむとして

暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に、一波は一波より甚しく、應仁の亂に及びては、遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として、天下をこの渾沌溟濛の裡に漂はすこと實に前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたた四方に充ち満ちぬ。艷麗なる百花は平和なる春にこそ咲誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮ゆべき。されば文學の如きは全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。

されど應仁の亂までは、流石に幕威なほ地に落ちず、殊に將軍義滿は柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に遭へりと雖も、社會の辛酸を知らざるが如く、それぞれ閑居を設けて文雅風流を樂しめり。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せしも此の時にして、能樂の勃興に伴ひて、當代唯一の文學たる謠曲を生じたるも實に此の

時代なりとす。

謠曲は蓋し當時の僧侶の手に成りしもの多かるべく、その中多く佛教の思想を含めり。趣向は幽靈顯れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて成佛するもの多數を占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、皆よく諧和して珠玉を轉ずる如き好調に富む。

能樂の餘興に狂言といふものあり、その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるものあり、その文は當時の言語をその儘に寫せるものにして、率直愛すべし。

之を要するに、この時代には多少特色を有する文學を産せざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸

時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繋ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。(藤岡東圃の文に據る)

二五 大原御幸

(一) 後白河法皇
(二) 一八四六
(三) 清盛の女、安徳天皇の御母。
(四) 山城國愛宕郡大原村、舊大原莊。
(五) 左大將實定。
(六) 大納言兼雅。
(七) 權中納言源通親。

かかりし程に法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思し召されけれども、きさらぎ彌生の程は嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつららも打溶けず、かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人人には後徳大寺花山院土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少少さむらひけり。
遠山にかかがる白雲は散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日あまりのことなれば、

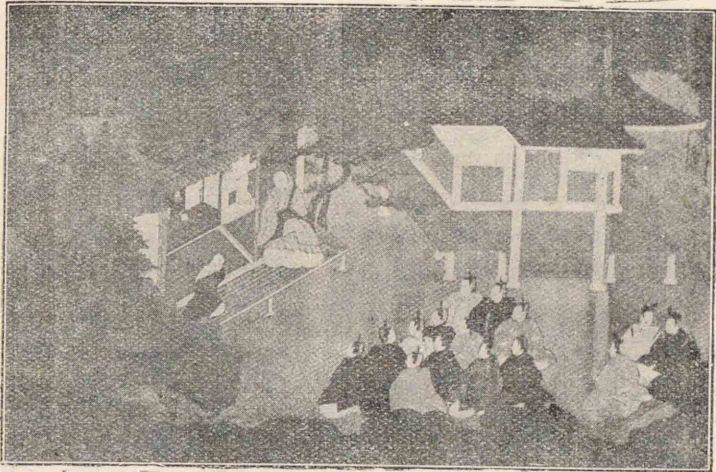
夏草の茂みがするをわき入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほどにも思し召し知られてあはれなり。

(八) 大原村大字草生にあり。

西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり、舊う造りなせる泉水木立よしあるさまの處なり。囊破れては霧不斷の香を焼き、樞落ちては月常住の燈を挑ぐ。こは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかこあやまたる。中島の松に懸れる藤波のうら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲の絶間より山時鳥の一聲も君の御幸を待ちがほなり。法皇これを觀覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなり
けれ

舊りにける巖の絶間より落ちくる水の音さへゆるよしある處



大原御幸繪卷

なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を觀覽あるに、軒には蔦朝顔はひかり、しのお交りの忘草、瓢箪屢空し、草、顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕す。ともいひつべし。杉の茸きめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひて、溜るべし。とも見えざりけり。後は山前は野邊、いささ小笹に風騒ぎ、世にたへぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ

和漢朗詠集の句



寂光院什物

垣や、僅に言とふものにては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら、青つづら、くる人稀なる處なり。法皇、人やある。人やある。と召されけれども、御いらへ申す者もなし。ややありて老衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。と仰せければ、この山の上へ花摘みに入らせ給ひて候。と申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや、御痛はしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五戒、十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かかる御目を御覽せられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を

不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒
十惡をせざることを。十惡とは殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見。

藤原信賴
信西の妻朝子

惜しませ給ひ候べき。ごぞ申しける。この尼の有様を御覽すれば身には絹布のわきも見えぬものを結びあつめてぞ着たりける。あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、抑、汝は如何なるものぞ。と仰せければ、この尼さめざめ泣いて、しばしは御返事にも及ばず、ややありて涙をおさへて、申すにつけて、憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむかたなうこそ候へ。さて、袖を顔に押しあてて、忍びあへぬさま、目も當てられず、法皇、げにこそ汝は阿波内侍にてあなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても、ただ、夢とのみこそおぼしめせ。さて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議のこご申す尼かなと思ひたれば、こごわりに申しけり。ごぞ各、感じあは

唐の名僧
安徳天皇

れける。

さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて、叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚並に先帝の御影をかけられたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝漢土のたへなる類、敷をつくしし綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りしこごども、今のやうに覺えて皆袖をぞしぼられける。

ややあつて、上の山より濃き墨染の衣着たりける。尼二人、岩のかげを傳ひつつ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あれはいかなるものぞ。と仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐臂にかけ、岩躑躅より具

平重衡妻

して持たせたまひて候は、女院に渡らせたまひ候。爪木に蕨折りそへて持ちたるは鳥飼中納言維實が女、五條大納言邦綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍局と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は「世をいこふ御習さいひながら、今かかる有様を見えまるませむずらむ恥しさよ、消えも失せばや」と思し召せどもかひぞなき。宵宵ごこの鬨伽の水、むすぶ袂もしをるるに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけむ。山へも返らせたまはず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる處に、内侍の尼まゐりつつ、花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早早御見参ありて、還御なし参らせ給ひ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞に

は聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。さて御見参ありけり。(平家物語)

念佛と声唱へる窓の前には來迎の尊ありて
標の御手にお取りていす方なめのまじりて
まじりての聲念佛と唱へると迎へる三三
かまてのまじりての聲念佛と唱へると迎へる三三
院のあちりかた

一聲の念佛を唱へては自今をすくわんが為めに窓の前

新訂新撰國語讀本卷九終

山陽中學校
牙立學年
乃組
山本春三

大正十四年四月二十一日
教育部省檢定
中國語科
校用

大正十三年十月二十四日印
大正十三年十月二十七日發
大正十四年一月十七日訂正印刷
大正十四年一月二十日訂正發行

新訂新撰國語讀本(全十冊)

定價	臨時定價
卷一、二、各金四拾壹錢	卷一、二、各金七拾錢
卷三、四、各金參拾七錢	卷三、四、各金六拾參錢
卷五、六、各金參拾七錢	卷五、六、各金六拾參錢
卷七、八、各金參拾參錢	卷七、八、各金五拾六錢
卷九、十、各金參拾參錢	卷九、十、各金五拾六錢



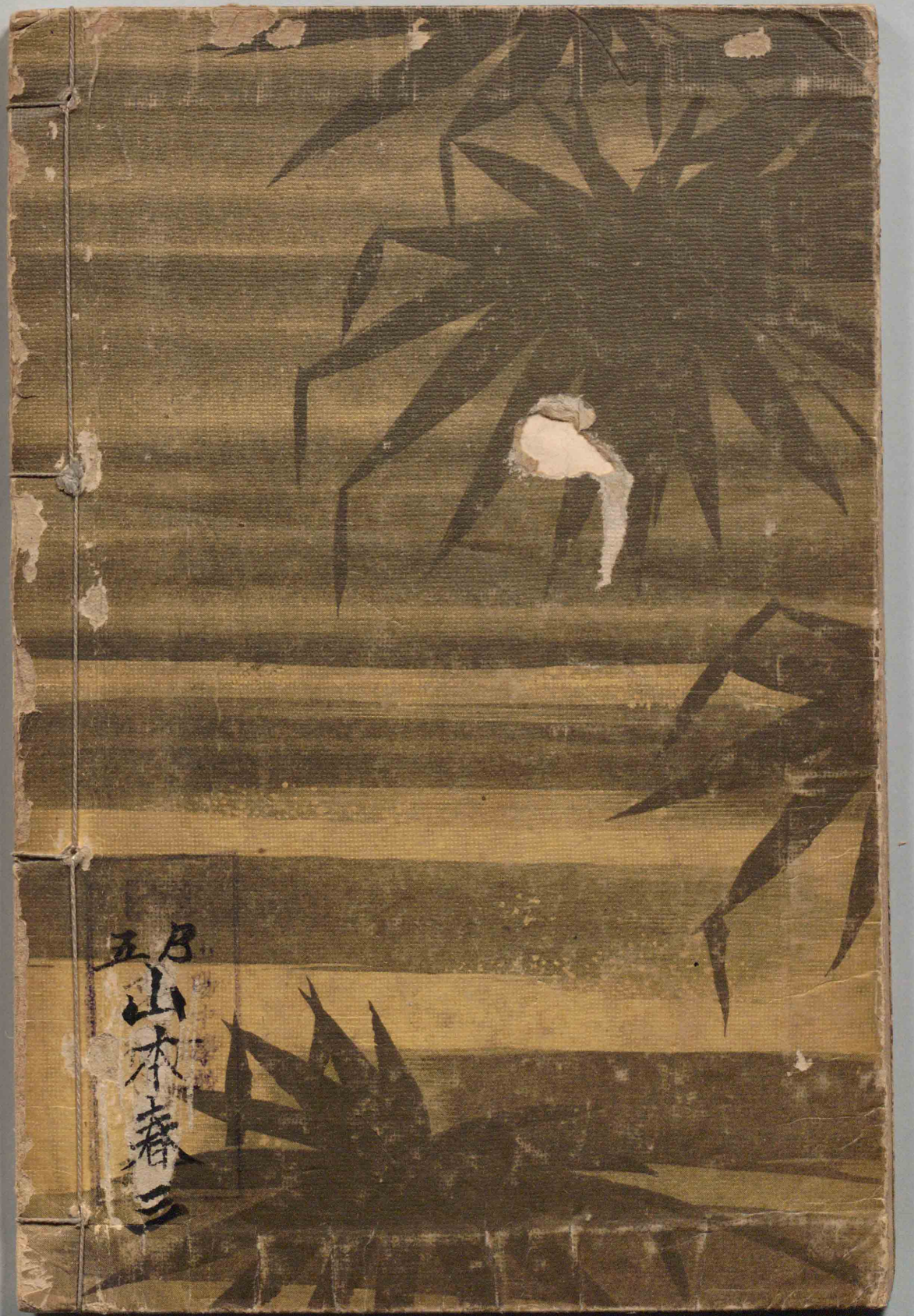
編者 佐々政一
 補修者 大町芳衛
 補修者 武島又次郎
 補修者 杉敏介
 印發者 東京市神田區錦町一丁目十番地
 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎

發行所

(東京市神田區錦町一丁目)
(振替口座東京四九九一番)

株式會社 明治書院

電話神田(25)一四一四番



五月山本春三